

ユダヤ人を救った日本のシンドラー
【杉原千畝物語】



(ACTION！なう実行委員会)

このたびは、電子書籍『杉原千畝物語』をお申込みいただき、ありがとうございます。

わたしたちは、杉原千畝氏の偉大な功績を後世に残すべく、「国会議員に直接声を届けられる日本唯一の署名サイト ACTION なう！」にて、署名活動を行なっています。

今年、唐沢寿明さん主演の映画も公開される『杉原千畝氏』

海外では「ヤド・ヴァシェム勲章」をはじめ多くの勲章を受章し、英雄として切手になり、リトアニアの首都ヴィリニウス通りの一つを『スギハラ通り』と名付けられるなど、極めて高い評価を得ている杉原千畝氏ですが、日本では十分な評価がなされておらず、教科書への記載も無いため、その知名度も決して大きくありません。

わたしたちは、杉原千畝氏の英断と功績を、あらためて日本国内でも再評価し、国民栄誉賞を付与することを、『内閣総理大臣』に求めています。

そして、杉原千畝氏の再評価は、きっと樋口季一郎氏など教科書に載らないその他の日本人の英雄たちの再評価にもつながることでしょう。

ぜひ、この機会に署名にもご協力ください。

↓↓以下ページから署名にご協力ください↓↓

[「命のビザ」で 6000 人ものユダヤ人を救った「日本のシンドラ」杉原千畝氏を再評価し、国民栄誉賞を！](http://action-now.jp/archives/633)

<http://action-now.jp/archives/633>



また、この署名を Twitter、Facebook などの SNS、ブログ、ホームページで、ぜひご紹介をお願いいたします。

上記署名ページにアクセスすると、最上部の SNS ボタンからワンクリックで紹介が可能です。

The screenshot shows the homepage of the ACTIONなう! website. At the top, there is a navigation bar with the logo and links for 'ACTION一覧', '新着情報', and 'ACTIONなう!とは?'. Below the navigation bar, the main content area features a large article titled '「命のビザ」で6000人ものユダヤ人を救った「日本のシンドラ」杉原千畝氏を再評価し、国民栄誉賞を！'. The article is dated 'BY DN2015 - 2015.06.24'. Below the title, there is a social media sharing section with buttons for 'いいね！' (6,713), 'Tweet' (1,123), and 'Pocket' (8). A red box highlights these buttons, and a red arrow points to a yellow banner that says '杉原千畝と「命のビザ」の話を、1人でも多くの日本人に伝えたい' with the text 'こちらをクリック！' (Click here!). Below the banner is a black and white portrait of Shigenori Kihara. On the right side of the page, there is a sidebar with a 'NEXT STORY' section, a 'PREVIOUS STORY' section, and a '今すぐ署名を！' (Sign now!) section. The 'Sign now!' section includes a Facebook login button and a progress bar showing '現在700人が賛同' (Currently 700 people have agreed) and 'あと1300人の署名が必要です！' (Need 1300 more signatures!). Below the progress bar is a form with fields for '氏名' (Name) and 'メールアドレス' (Email address).

日本人の誇り、杉原千畝氏の功績を後世に残すために、ぜひご協力ください。

ACTION なう！実行委員会

<目次>

1. 外交官を目指すまで 1～6

杉原が外交官を目指すまで
外務省の官費留学生となる
ソ連との交渉で外交的大勝利
失意の中、満洲国外交部退官

2. シンドラーとは？ 7～13

「日本のシンドラー」のモデルとなったシンドラーとは？
ユダヤ人の救世主はナチ党员！？
何がシンドラーにユダヤ人救出を決心させたのか？
「シンドラーのリスト」作成まで
ユダヤ人救出大作戦
ハリウッドで映画化、そしてアカデミー賞

3. 緊迫の欧州へ 14～23

杉原、開戦迫る欧州へ
ヨーロッパにおける第二次世界大戦開戦の背景
外交官杉原の最大の任務とは
日常生活に潜むドイツの暗い影

4. 杉原の苦悩 24～33

日本領事館に押し寄せるユダヤ人
なぜユダヤ人たちは杉原の元に殺到したのか？
外交官杉原の苦悩
「命のビザ」発給へ！

5. 杉原の決断 34～43

ビザ発給に向けた交渉
杉原によるユダヤ人救出の「命のビザ」
必死のビザ発給作業
「命のビザ」により救われたユダヤ人

6. 領事館閉鎖とユダヤ人の運命 44～50

領事館閉鎖後のユダヤ人が直面した困難
恐怖の移動殺戮部隊「アインザッツグルッペン」とは？
外交官杉原千畝がいた奇跡

7. リトアニアにおけるホロコースト 51～63

なぜユダヤ人は迫害されるのか？
リトアニアにおけるホロコースト
リトアニアでユダヤ人を襲った悲劇の背景
リトアニア人によるユダヤ人の大量虐殺

8. 杉原の次なる舞台 64～71

リトアニアを退去後の杉原
ポーランドと日本の関係
最後の任地ブカレストへ
杉原を「命のビザ」発給へと突き動かしたのは？

9. 杉原が繋いだ命のバトン 72～80

「日本のシンドラー」から引き継がれた命のバトン（その 1. 根井三郎）
「日本のシンドラー」から引き継がれた命のバトン（その 2. 大迫辰雄）
「日本のシンドラー」から引き継がれた命のバトン（その 3. 小辻節三）

10. 上海に殺到するユダヤ人 81～92

なぜ上海なのか？
上海租界とは？
上海にも迫るナチスの魔の手
上海に渡ったユダヤ人の運命

11. 感動の再会 93～104

外務省退職は「命のビザ」発給の報復！？
「Sempo Sugihara」の発見と感動の再会

1.外交官を目指すまで

杉原千畝が「日本のシンドラマー」として広く世界にその名を知られることとなった「命のビザ」を発給したのは 40 歳の時のこと。自らの職を賭し、およそ 6000 人ものユダヤ人の命を救うまでの道のりはどのようなものだったのか。

杉原が外交官を目指すまで

杉原は 1900 年（明治 33 年）1 月 1 日、岐阜県に生まれる。

税務署の職員だった父は小学校を全甲（現在のオール 5）という優秀な成績で卒業した息子に医師なるよう希望したが、杉原自身は医学に興味はなく、「英語の教師になりたい」と早稲田大学高等師範部英語科（現・早稲田大学教育学部英語英文学科）の予科に入学。

その学生時代に早稲田奉仕園の信交協会に所属しており、そこで初めてキリスト教と出会う。

早稲田大学への進学は父の意に反したものであったので、実家から仕送りなど一切の援助はなく、学費や生活費をまかなうために早朝の牛乳配達など

のアルバイトをしたものの、まったく足りずたちまち生活苦に陥ってしまった。

外務省の官費留学生となる

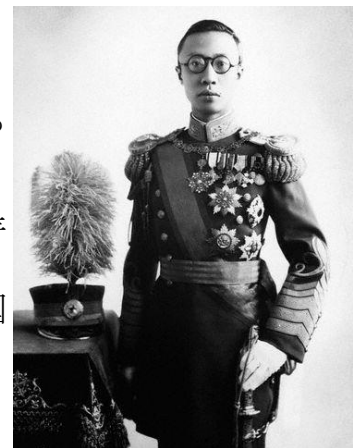
そんな折、偶然図書館で目にした地方紙の広告で外務省留学生試験の存在を知る。受験資格は「旧制中学卒業以上の満 18 歳から 25 歳の者」であったが、その内容は法学・経済・国際法から外国語 2 ヲ国語という具合で、旧制中学の学修内容とはかけ離れたものであり、実際は杉原のような大学在籍者や旧制高校修了者以外の合格は難しいものであった。

連日大学の図書館にこもり、猛勉強を重ねた末、難問を制して見事に合格した杉原は早稲田大学を中退し、日露協会学校（後のハルビン学院）に入学。外務省の官費留学生として中華民国のハルビンに派遣され、そこでロシア語を学ぶ。ロシア語選択は当初の杉原の選択ではなかったが、今後のロシア語の重要性を説く試験監督官の勧めで決めたという。（ちなみに、この官費留学生の募集で、英独仏語の講習生募集は行われなかった。）

1924 年（大正 13 年）に外務省書記生として正式に採用され、ハルビン大使館二等通訳官などを経て、1932 年（昭和 7 年）3 月に満洲国政府外交部事務官となる。

順調に外交官としてのキャリアをスタートさせたかに見えた矢先の 1931 年（昭和 6 年）、事態が急転する。日本が経営権を持つ南満洲鉄道が爆破されたことを契機に、満洲事変が勃発したのだ。

鉄道の爆破は、関東軍が自ら引き起こした事件だったが、この機に満洲を支配した日本は清朝最後の皇帝宣統帝溥儀を執政に迎え、傀儡国家である満洲国の建国を宣言する。



ハルビンの日本総領事館にいた杉原は、上司の大橋忠一総領事の要請で、満洲国政府の外交部に出向。そこで「ロシア問題のエキスパート」としての立場を確立させる大仕事を任されることとなる。

ソ連との交渉で外交的大勝利

満洲国政府外交部で杉原が任された大仕事、それは中国とソ連が共同所有していた北満洲鉄道の譲渡交渉であった。

当初、ソ連の要求額が 6 億 2500 万円であったのに対し、日本側が用意していた買収額はわずか 5000 万円。実に 10 倍以上もの金額差だった。

交渉は困難を極めたが、杉原の行った緻密な調査によりソ連の高額な要求額の根拠は次々と否定され、最終的には譲渡額を 1 億 4000 万円で決着させることに成功。

これはまさに日本外交の大勝利といえる成果であった。

しかし、このとき得た名声が後に杉原のキャリアを邪魔することにもなった。後に本国の外務省に復職し、モスクワ大使館赴任を任命された際、ソ連がペルソナ・ノン・グラータを発動して杉原の入国を拒否。

他国の外交官の入国を拒否するという通達はまさに異例中の異例のことであったが、その理由は北満州鉄道譲渡交渉の時に杉原が見せつけた外交官としての手腕をソ連が恐れたためだと考えられている。

プライベートでは、1924 年（大正 13 年）白系ロシア人女性クラウディア・セミョーノヴナ・アポロノワと結婚するが、1935 年（昭和 10 年）に離婚。同年、菊地幸子と再婚する。

なお、満州時代に杉原はロシア正教会の洗礼を受けている。正教徒としての聖名（洗礼名）は「パヴロフ・セルゲイヴィッチ」、つまりパウエル（パウロ）である。

失意の中、満洲国外交部退官

日本外交きっての「ロシア通」という評価を得てまもなく、1935 年（昭和 10 年）に満洲国外交部を退官。

その理由として、ロシア語が堪能だった杉原に対し、関東軍から破格の金銭的条件と引き換えに軍部のスパイになるよう強要されたことや、満州での軍人たちの目に余る暴挙への憤慨があったとされており、「驕慢、無責任、出世主義、一匹狼の年若い職業軍人の充満する満洲国への出向三年の宮仕えが、ホトホト厭」になり外交部を辞任。

後日、幸子夫人に退官の理由を問われた際には、「日本人は中国人に対してひどい扱いをしている。同じ人間だと思っていない。それが、我慢できなかった」と答えたという。

満洲国は建前上は独立国だったが、実質上の支配者は関東軍であったため、

関東軍からの要請を断り、同時に満洲国の官吏として勤務し続けることは、事実上不可能だったのだ。

杉原千畝が「日本のシンドラー」と言われる所以となった「命のビザ」発行の5年前のことである。

2. シンドラーとは？

杉原千畝は「命のビザ」発給により“日本のシンドラー”と呼ばれるようになったが、元となる「シンドラー」とはどのような人物だったのか？

「日本のシンドラー」のモデルとなったシンドラーとは？

オスカー・シンドラーはドイツ人の実業家で、第二次世界大戦中、自身が経営する工場に必要な人員確保という名目のもと、約 1200 人ものユダヤ人の命をナチスによるガス室での虐殺から救った人物である。



彼は 1908 年 4 月 28 日、当時オーストリ

ア・ハンガリー帝国領だったメーレン地方(モラヴィア地方)のツヴィッタウ（現・チェコのスヴィタヴィ）において、農業機械の工場を経営する父ヨハン・ハンス・シンドラーと母フランツィスカ・ファニーの間に長男として生まれ、エルフリーデという妹が一人いた。

ユダヤ人の救世主はナチ党员！？

シンドラーは 1935 年にはズデーテン・ドイツ人の指導者的存在だったコンラート・ヘンライン率いる「ズデーテン・ドイツ郷土戦線（後のズデーテン・ドイツ人党）」というドイツ系ズデーテン住民によるドイツ民族主義的な政党に入党。ここを通じてヴィルヘルム・カナリス提督率いるドイツ国防軍諜報部「アプヴェール」と接触し、その諜報員として現在のチェコやポーランドで活動。

チェコにおける彼の諜報活動が露見した際、大叛逆罪の罪で死刑の宣告を受けるが、1938 年 10 月にドイツ軍によるズデーテン併合があったため、刑の執行は中止された。

その後、シンドラーは国家社会主義ドイツ労働者党（ナチス党）に志願して入党。

アプヴェールでの仕事から身を引き、ドイツのポーランド侵攻に合わせ、戦争での一儲けを狙い、ポーランドのクラクフにやってきたのだ。

何がシンドラーにユダヤ人救出を決心させたのか？

1939 年 10 月、ポーランドへやってきたシンドラーは、まず最初にナチスに没収される前はユダヤ人の所有であった、落ちぶれたホーロー容器工場を買い取る。そして、後に深い友情で結ばれることになるユダヤ系ポーランド人会計士イツァーク・シュテルンの助言を受けながら、闇商売で資産を拡大。

ドイツ軍の厨房用品を製造するなどして急激な成長を遂げた彼の工場は、わずか 3 カ月で 250 人のポーランド人労働者を使うようになり、その中には 7 人のユダヤ人労働者も含まれていた。

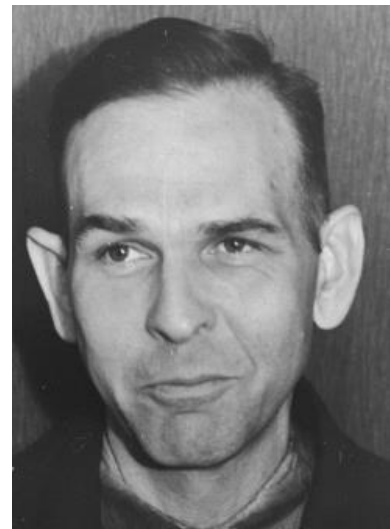
彼の工場は 1942 年末までに、巨大なホーロー容器工場から軍需工場に成長していった。広大な敷地に 800 人近い労働者が働いており、その中にはクラクフ・ゲットーのユダヤ人 370 人もいた。

ユダヤ人救済というシンドラーのナチス党政権への抵抗は、イデオロギー的な理由からではなかった。彼は無力なユダヤ人住民たちに対するナチスの非道に異を唱えたのだ。

シンドラーが行動を起こす契機となったのが、1943 年（昭和 18 年）のクラクフ・ゲットーが解体である。

ゲットーにいたユダヤ人たちはプワシュフ収容所に送られることになったが、ここには残虐非道なサディストとして悪名高いアーモン・ゲートが所長として赴任していた。

身長 192cm、体重 120kg の巨漢であったゲートは、すぐにサディスティックな性向を示し始めた。毎朝狙撃銃で囚人を無差別に撃ち殺し、ロルフとラルフと名付けた 2 頭の飼い犬の訓練と称してユダヤ人を生きたまま噛み殺させることを日課としていたという。



ゲートに直接殺害された囚人は 500 人以上にのぼるといわれ、そのため「プワシュフの屠殺人」というあだ名をつけられた。

シンドラー自身もナチの黨員であり大儲けを企んで占領下のポーランドにやって来たため、当初は金儲けにしか興味がなかったが、収容所での筆舌に尽くし難い蛮行を目の当たりにし、ついにユダヤ人を救い出すことを決意するのである。

「シンドラーのリスト」作成まで

シンドラーのユダヤ人救済において大きな助けとなったのは、彼の工場が“軍需工場”としてドイツ軍司令部からも認められていたことが挙げられる。これにより、彼は経済面で大きな利益のある契約を締結出来ただけでなく、人道面でも彼の工場で働くユダヤ人たちが絶滅収容所（※）へ移送される危険が迫った時に、工場の生産ラインに不可欠な人員をだと主張することで子供や大学生を熟練の金属工と称して従業員リストを作成し、ガス室送りから救うことが出来たのである。

（※絶滅収容所とは、アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所、ヘウムノ強制収容所、ベウゼツ強制収容所、ルブリン強制収容所、ソビボル強制収容所、トレブリンカ強制収容所、以上 6 つの強制収容所を指す言葉）

これがかの有名な「シンドラーのリスト」である。

ユダヤ人救出大作戦

1944 年末、プワシュフはソビエト軍の侵攻により、すべての収容施設の解体を余儀なくされ、ここにいた 20,000 人以上のユダヤ人が絶滅収容所に移送。ユダヤ人の身に迫る危機から救い出したい一心で、シンドラーは

彼がズデーテン地方のブリュンリッツ（現・チェコのブルニェネツ）で新たに手に入れた工場で「軍需物資の生産」を継続するため、必要な人員を連れていくことの許可をドイツ軍の司令官から得る。

その労働力には、プワシュフの収容所からかなりの大人数が選ばれ、総数で 800 人にもなった。そのうち 700 人がユダヤ人、300 人が女性だった。プワシュフの収容所からブリュンリッツ労働収容所への移送はグロース・ローゼン強制収容所を経由して行われた。

ブリュンリッツ労働収容所への移送途中で、「すべての囚人は男女の区別なく別の収容所に移される際には検疫所に行くように」という親衛隊の指令書が届くが、経由地のグロース・ローゼン強制収容所には女性労働者たちを管理するのにはまだ十分な人員も施設もまだ準備されていなかった。そのため彼女たちは危うく 60km も離れたアウシュヴィッツに送られそうになるが、間一髪のところではシンドラーによって助けだされる。

ちなみに、ブリュンリッツ工場は兵器工場として分類されたが、操業 8 か月近くで積荷一個分だけの実弾を生産しただけであった。シンドラーは偽

りの生産数を提示して、ドイツ当局にその存在を正当化したのだ。彼の勇気ある行動により 1200 人ものユダヤ人がその尊い命を救われた。

終戦後、シンドラーのもとに一つの指輪が送られた。

これは彼が救い出したユダヤ人たちが感謝の印に、彼らに唯一残されていた金歯から作ったもので、そこにはユダヤ教の聖典であるタルムードにある「一人の人間を救う者は世界を救う」という言葉が刻まれていたという。

ハリウッドで映画化、そしてアカデミー賞

この話はユダヤ系アメリカ人であり、ハリウッド映画界の巨匠でもあるスティーヴン・スピルバーグによって 1993 年に映画化されており、第 66 回アカデミー賞では 12 部門にノミネート、そのうち作品賞、監督賞、脚色賞、撮影賞、編集賞、美術賞、作曲賞の 7 部門を受賞した。

ドイツ人のシンドラーは約 1200 人のユダヤ人を救った。一方で、この狂気の時代に極東の島国の一人の外交官の勇気ある行動によって 6000 人ものユダヤ人の命が救われたことは、これほど広くは知られていない。

3.緊迫の欧州へ

杉原がおよそ 6000 人ものユダヤ人の命を救う「命のビザ」を発給したりトアニアへついに赴任。

第二次世界大戦の開戦を直前に控え、緊迫の度合いを深めるヨーロッパで、杉原は如何にしてユダヤ人たちの命を救えたのか。

杉原、開戦迫る欧州へ

満州から帰国した杉原は外務省に復職。

1936 年（昭和 11 年）、モスクワ大使館赴任を任命されるが、ソ連がペルソナ・ノン・グラータを発動して杉原の入国を拒否。

＜ペルソナ・ノン・グラータとは？＞

外交団員の一員となるには外交官になる必要があり、外交官になるには派遣国にそう認められると同様に、接受国にもそう認めてもらわねばならない。接受国から受け入れを認められた場合は「アグレマン」（仏: *agrément*）がされるが、逆に拒否されることもある。この外交官待遇拒否が「ペルソナ・ノン・グラータ」である。

この拒否はいつ何時でも一方的に発動でき、またその理由を提示する義務はないが提示してもよい。接受国はいずれかの者がその領域に到着する前においても、対象外交官がペルソナ・ノン・グラータであることを明らかにすることができる。ペルソナ・ノン・グラータの通告を受けた場合には、派遣国

は状況に応じて対象者の「本国へ召還又は外交官任務終了」をしなければならない。

対象の外交官に対し、接受国外務省から駐在公館を通じて、「あなたは我が国に駐在する外交官に相応しくないので本国へお帰り下さい。もしくは外交官任務を終了して下さい」と正式に通告することで発動されることが多い。派遣国が「ペルソナ・ノン・グラータ」発動後に対象外交官の「本国へ召還又は外交官任務終了」の履行義務を拒否した場合又は相当な期間内に行わなかった場合には、接受国は対象者の外交官待遇を拒否して一般市民として拘束できる。

「ペルソナ・ノン・グラータ」は接受国が有する唯一の拒否手段であり、これ以外の手段（強制送還、身柄拘束）を用いて外交官の非行を制裁することはできない。

また、本来は入国が当然に許可されるべき要人であっても、経歴や言動などが相手国に問題視された場合には到着地国際空港の制限区域から出場することが認められず、帰国を求められる。この措置をも指す。

(Wikipedia より)

他国の外交官の入国を拒否するという通達はまさに異例中の異例のことであったが、その理由は北満州鉄道譲渡交渉の時に杉原が見せつけた外交官としての手腕をソ連が恐れたためだと考えられている。

1937 年（昭和 12 年）にはフィンランドの在ヘルシンキ日本公使館に赴任し、次いで 1939 年（昭和 14 年）いよいよ運命の地、リトアニアの在カ

ウナス日本領事館領事代理となる。

ヨーロッパにおける第二次世界大戦開戦の背景

ドイツは第一次世界大戦の敗北により多くの領土を失った挙句、莫大な戦争賠償金も抱えていたところにアメリカから端を発した世界大恐慌に襲われる。この恐慌に対してアメリカではニューディール政策、イギリス・フランスではブロック経済という対策をそれぞれ行う。

これらの対策は自分たちの国や植民地だけで貿易を行い、他の国からの輸入品には高い税金を掛けて外国の商品が入って来るのを防ぐという政策。これにより自分たちの内輪だけで経済の交流を活性化させて恐慌を乗り切ろうとしたものである。

しかし、これは植民地や領土をたくさん持っていればこそ有効な政策であり、持たざる国にとっては輸出品に高い税金（関税）を掛けられるので貿易収支はさらに悪化の一途をたどるのみであった。

そして持たざる国の代表がドイツとイタリアであり、これらの国では情勢を挽回するべく国民は強いリーダーシップを持った人物を待ち望むことになる。

そこに現れたのがドイツではヒトラーであり、イタリアではムッソリーニであった。



両国の国民は絶望感と被害者意識を募らせ、ファシズム、ナチズムの運動が勢力を得る下地が醸成されていたのだ。

1937 年（昭和 12 年）、まずドイツが動き出す。

ヒトラーは東方に拡大政策をとることを宣言。

翌年にはオーストリアを併合。

次にドイツはチェコスロバキアのズデーテン地方の割譲を要求。

チェコスロバキアはこの要求を一度は拒絶するが、ミュンヘン会談においてズデーテン地方のドイツへの割譲が決定されてしまう。

この会談はイギリスのチェンバレン、フランスのダラディエ、イタリアのムッソリーニ、ドイツのヒトラーによる4カ国首脳会議であり、当事者であるはずのチェコスロバキアは完全に蚊帳の外に置かれた状態であった。

ミュンヘン会談ではドイツによる領土要求はこれが最後であるということとで妥協し譲歩したイギリス・フランスの両国であったが、ドイツの要求はこれにとどまらずチェコスロバキアを解体。

次にドイツが狙いを定めたのがポーランドであった。

ドイツは第一次世界大戦敗戦時にバルト海への出口となるポーランド回廊という地域をポーランドに割譲されており、その回復を要求したことでドイツとポーランドとの間で戦争への緊張が一気に高まる。

ミュンヘン会談において思い通りの結論を引き出したことで強気に出てきたドイツに対し、チェコスロバキアの二の舞は避けたかったイギリス・フランスはポーランドに安全保障条約を約束し、ドイツとの戦いの準備を始める。このイギリス・フランスの動きに対しドイツはソ連との間で独ソ不可侵条約を結ぶことに成功。

ついにドイツによるポーランドへの侵攻が開始する。

イギリス・フランスはポーランドとの約束通り、ドイツに宣戦布告。

ここに第二次世界大戦が開戦した。

外交官杉原の最大の任務とは

上記の通り、当時のヨーロッパは急速に拡大するドイツの勢いに対し、イギリス・フランスは話合いでドイツの望むものを探り、妥協をもって現状の修正を図り、戦争を回避しようとするいわゆる宥和（ゆうわ）政策をとっていた。

しかしながら、小国を犠牲にして一時的な平和を得ようとしたこの政策は急速に強大化するドイツの前に破綻。

日本国内に目を向ければ、日本の友好国・ドイツが、共通の敵国であったはずのソ連と「独ソ不可侵条約」を締結したことで、日本外交はまさに大混乱に陥っていた。

バルト海に面したリトアニアは東欧の小国であったが、開戦を間近に控え、ドイツとソ連に挟まれた地理的状況から、両国の情勢を探り、緊迫したヨーロッパ情勢を巡る機密情報を収集するのに適していた。

そしてそれこそが杉原の最大の任務であった。

その任務の具体的内容は、1967 年（昭和 42 年）に書かれたロシア語の書簡の冒頭で、以下のように述べられている。

カウナスは、ソ連邦に併合される以前のリトアニア共和国における臨時の首都でした。外務省の命令で、1939 年の秋、私はそこに最初の日本領事館を開設しました。リガには日本の大使館がありましたが、カウナス公使館は外務省の直接の命令系統にあり、リガの大使館とは関係がありませんでした。ご指摘の通り、リガには大鷹正次郎氏がおり、カウナスは私一人でした。

周知のように、第二次世界大戦の数年前、参謀本部に属する若手将校の間に狂信的な運動があり、ファシストのドイツと親密な関係を取り結ぼうとしていました。この運動の指導者の一人が大島浩・駐独大使であり、大使は日本軍の陸軍中将でした。大島中将は、日独伊三国軍事同盟の立役者であり、近い将来におけるドイツによる対ソ攻撃についてヒトラーから警告を受けていました。しかし、ヒトラーの言明に全幅の信頼を寄せることが出来なかったので、大島中将は、ドイツ軍が本当にソ連を攻撃するつもりかどうかの確証をつかみたいと思っていました。日本の参謀本部は、ドイツ軍による西方からのソ連攻撃に対して並々ならぬ関心を持っていました。

それは、関東軍、すなわち満洲に駐留する精鋭部隊をソ満国境から可及的速やかに南太平洋諸島に転進させたかったからです。ドイツ軍による攻撃の日時を迅速かつ正確に特定することが、公使たる小官の主要な任務であったのです。それで私は、何故参謀本部が外務省に対してカウナス公使館の開設を執拗に要請したのか合点がいったわけです。日本人が誰もいないカウナスに日本領事として赴任し、会話や噂などをとらえて、リトアニアとドイツとの国境地帯から入ってくるドイツ軍による対ソ攻撃の準備と部隊の集結などに関するあらゆる情報を、外務省ではなく参謀本部に報告することが自分の役割であることを悟ったのです。

(Wikipedia より－ 1967 年に書かれた千畝による露文書簡の冒頭部分)

1940 年（昭和 15 年）ソ連軍がリトアニアに侵攻。

杉原の元にもソ連から通達が届く。

「リトアニアは独立国ではなくなったため、各国は領事館を閉鎖し、領事

館員及びその家族は、国外退去すべし」



残された時間はあとひと月。

出来る限りの情報を本国へ送ることで、杉原の任務は終わるはずだった。

日常生活に潜むドイツの暗い影

当時リトアニアの日本領事館は一般の民家（アパート）の1・2階部分を借りて業務を行っており、杉原一家も同じ建物内に移り住んでいた。

本来、国を代表する外交官という特権的地位が認められているにも関わら

ず、彼らの生活にもドイツの黒い影が密かに忍び寄ってきていた。

いわゆるスパイの存在である。

領事館には現地採用スタッフがおり、当時杉原の下で働いていた事務員のドイツ系リトアニア人ヴォルフガング・グツェはドイツ警察（通称ゲシュタポ）のスパイであったという。

外交の世界では想定内のこととはいえ、行動のすべてを監視される生活がいかに窮屈であったかは想像に難くない。

「命のビザ」大量発給まであと1年。

このような状況のもとで杉原は如何にしてユダヤ人たちの命を救うことが出来たのか。

4.杉原の苦悩

ナチス・ドイツの脅威が迫る中、ユダヤ人たちが生き残るためには、もはや日本通過ビザを取得し第三国に逃げるしか道は残されておらず、彼らの運命は杉原の双肩にかかっていた。

人道上の配慮と外交官としての立場の狭間で悩む杉原が出した答えとは。

日本領事館に押し寄せるユダヤ人

1940 年（昭和 15 年）7 月 18 日、リトアニアの首都カウナスにある日本領事館の前には朝早くからたくさんの人たちが集まっていた。



彼らはナチス・ドイツの迫害から逃れるために隣国ポーランドからやって来たユダヤ人で、日本通過ビザの発給を求めて命がけでこの領事館までたどり着いたのだった。

後に杉原はその時の様子を回想し、その手記の中で運命の日の光景をこう描いている。

忘れもしない 1940 年 7 月 18 日の早朝の事であった。

6 時少し前。表通りに面した領事公邸の寝室の窓際が、突然人だかりの喧しい話し声で騒がしくなり、意味の分からぬわめき声は人だかりの人数が増えるためか、次第に高く激しくなってゆく。

で、私は急ぎカーテンの端の隙間から外をうかがうに、なんと、これはヨレヨレの服装をした老若男女で、いろいろの人相の人々が、ザッと 100 人も公邸の鉄柵に寄り掛かって、こちらに向かって何かを訴えている光景が眼に映った。(Wikipedia より)

なぜユダヤ人たちは杉原の元に殺到したのか？

リトアニアのカウナス日本領事館にユダヤ人が殺到した理由を考えるためには、まず当時のヨーロッパの情勢を知る必要がある。

1939 年（昭和 14 年）8 月、ソ連とドイツの間で締結された独ソ不可侵条

約に付帯する秘密の議定書により、東ヨーロッパにおける独ソの勢力範囲の線引きが行われ、東欧諸国（ポーランド、ルーマニア）、バルト三国、フィンランドはソ連の勢力圏に置かれることが同意された。

ドイツがポーランドに侵攻し第二次世界大戦が開戦すると、ソ連も東側から侵攻。これによりポーランドは東をソ連、西をドイツに支配されることになる。

その後、ソ連はバルト三国のエストニア、ラトヴィア、リトアニアにも侵攻し、その勢いのままフィンランドに領土の一部を引き渡すよう要求。

フィンランドがこれを拒否すると、ソ連はフィンランドから砲撃を受けたという話をでっちあげ、1939年（昭和14年）11月30日に宣戦布告。

これが「冬戦争」といわれる戦争である。

フィンランドは大国相手に善戦するも兵力の差は明らかで、1940年（昭和15年）3

月13日に国土の一割をソ連に引き渡すことを約束し、戦争は終結する。



一方、ヨーロッパの西側では、ポーランドに侵攻していたドイツが 1940 年（昭和 15 年）4 月にはデンマークとノルウェーを、5 月にはオランダ、ベルギー、ルクセンブルグを、6 月にはパリを攻め落とし、ついには大国フランスをも降伏させていた。

ユダヤ民族の根絶政策を掲げるナチスの脅威から逃れるため、ポーランドにいたユダヤ人たちは「東方のスイス」と呼ばれる中立国のリトアニアに逃げ込んでいたが、ソ連が進駐してきたことでリトアニアにも留まりつづけることができなくなった。

そこでユダヤ人たちは安住の地を求め、ヨーロッパからの脱出を図る。

彼らにとって安住の地とはどこか？

まずはアメリカ、そしてイスラエル（当時は英領パレスチナ）、またはユダヤ人の受け入れに寛容であった上海あたりであろう。

しかし、アメリカに行くためにドイツ軍が追撃してくる西方に退路を探す

のは問題外だった。また、トルコ政府がビザ発給を拒否したことで、トルコ領から直接パレスチナに向かうルートも閉ざされた。

もはや唯一彼らに残された逃避ルートは、シベリア経由で日本に渡り、そこから第三国を目指すというものしかなかった。

日本がユダヤ人弾圧政策を行っていなかったことに加え、ソ連の退去命令により、リトアニアにある各国の在外公館が閉鎖されていく中、この時点で開いていたのは日本領事館だけだったというのも理由の一つであった。

しかし、日本とドイツは同盟関係にあったため、日本も安住の地とはいえなかった。そこでユダヤ人たちは名目でもいいから行先国を設定し、そこへ向かうため日本を通過することを認めるビザを日本領事館が発給してくれるよう求めたのだ。

日本通過ビザを取得できれば、カウナスからソ連を経由して日本までの脱出ルートが開けることになるからだ。

では、名目上の行先国とそこへの入国ビザはどのように入手したのか？

実は、1940 年（昭和 15 年）5 月に在カウナスのオランダ領事館の領事に就任していたヤン・ズヴァルテンディクはユダヤ人に同情的で、「オランダ領事館はキュラソーをはじめとする南米オランダ領への入国はビザを必要としない旨、ここに確認する」という入国ビザに準ずる証明書を発行していた。

通称「キュラソー・ビザ」といわれるこの証明書は正式の入国ビザではなかったが、ユダヤ人たちは日本領事館がこれをビザと同様の効力を持つと認め、通過ビザを発給してくれるよう望みをかけたのだった。

ユダヤ人難民たちが、カウナスの日本領事館に殺到したのは、こうした背景があったのだ。

外交官杉原の苦悩

「日本の通過ビザ」を求め必死になって懇願するユダヤ人たちを目の前にして、杉原は苦悩していた。

そもそも当時ユダヤ人たちが合法的に国外に脱出するためには、その許可証としてのビザが必要であり、ビザを入手するための必要条件是以下のとおりであった。

1. 現滞在国から出国許可を得ること。
2. 最終受入国の許可を得ること。
3. 通過国の許可を得ること。
4. 最終受入国までの間の十分な旅費を所持していること。
5. さらに大前提としてビザを発給するのに問題が無いという身分証明書を提示すること。

最終受入国の許可は前述の「キュラソー・ビザ」により得られており、ビザ発行の最低限の条件をクリアしたユダヤ人の代表団は、杉原にナチスの恐怖と自分たちの置かれている窮状を必死で訴え、何とかビザを発給してもらえよう懇願した。

しかし、最終受入国の許可を得たといっても、それ以外の問題がまだ残っていたので事はそう簡単には進まなかった。

問題とは「日本の受入れ許可」「その間の通過する国の許可」「渡航費用」などである。

超えるべきハードルは決して低くはなかったが、ユダヤ人たちの必死の訴えに心を動かされた杉原は言った。

「あなた方は極めて同情すべき境遇にあります。

私は自分に与えられた権限や守るべき規定の範囲内で、できる限りのことをしたいと思うが、人数があまりに多いので上司の外務大臣の了解を得なければならぬので、数日待っていて下さい」

残された問題のうち、通過国の許可は杉原自身がソ連領事館に出向き、日本通過ビザでソ連国内通過は可能かを打診し、問題なしとの回答を得る。費用の問題も神戸のユダヤ人協会が工面するということで解決。残る問題は日本通過ビザの発給だけだった。

ナチス・ドイツの脅威が迫っており一刻を争う状況の中、杉原は緊急のビザ発給許可を外務省に求めるが、外務省からの回答は「行き先国の入国許可手続を完了し、旅費及び本邦滞在費等の相当の携帯金を有するものだけビザ発給を許可する。無条件に難民を受け入れるわけにはいかない」という杓子定規な回答だった。

外務省としては日独伊三国同盟の締結を間近に控え、むやみにドイツを刺激したくないという国内の政治的事情から、ドイツの政策に真っ向から反

対する許可を出す訳にはいかなかったのだ。

しかし、着の身着のままポーランドを脱出してきたユダヤ人のほとんどはこれらの受給資格を満たせるはずもなく、杉原は再び「彼らは逼迫した状況にあり、特別にビザを発給しても良いのではないか」と、本省に掛け合うも判断は変わらなかった。

「命のビザ」発給へ！

再三の要請にも関わらず、外務省は頑なにこれを拒否。

ユダヤ人の人命救助、かたや外交官として本国の指示に従うべきとの判断の狭間に立たされて杉原は迷い、悩む。

杉原は、妻・幸子に語りかけた。

「外務省に背いて、領事の権限でビザを出そうと思う」

「わたし達はどうなるか分かりませんが、そうしてあげてください」

(杉原幸子著「六千人の命のビザ」より)

そして 1940 年 (昭和 15 年) 7 月 25 日、ついに自らの心に従った杉原は、職を賭して日本通過ビザの発給を決断する。

後に杉原は手記の中でこの時のことを振り返り次のように話している。

最初の訓令を受理した日は、一晩中私は考えた。考えつくした。

訓令を文字通り民衆に伝えれば、そしてその通り実行すれば、私は本省に対し従順であるとして、ほめられこそすれ、と考えた。

仮に当事者が私でなく、他の誰かであったとすれば、恐らく百人が百人、東京の訓令通り、ビザ拒否の道を選んだだろう。

それは何よりも、文官服務規程方、何条かの違反に対する昇進停止、乃至、減首が恐ろしいからである。

私も何をかくそう、訓令を受けた日、一晩中考えた。

果たして浅慮、無責任、我無者らの職業軍人グループの、対ナチス協調に迎合することによって、全世界に隠然たる勢力を擁する、ユダヤ民族から永遠の恨みを買ってまで、旅行書類の不備、公安配慮云々を盾にとって、ビザを拒否してかまわないのか。

それが果たして、国益に叶うことだということのか。

苦慮、煩悶の挙句、私はついに、人道、博愛精神第一という結論を得た。

そして私は、何を恐れることなく、職を賭して忠実にこれを実行し了えたと、今も確信している。

(杉原千畝手記より)

ついに「命のビザ」発給へ！！

5.杉原の決断

「命からがらナチスの迫害から逃げてきたユダヤ人たちの、助けを求めて差し出す手を振り払うことなど私には出来ない」

本国からビザ発給の許可が下りぬまま、ついに杉原千畝による職を賭したユダヤ人救出劇が始まる！！

ビザ発給にむけた交渉

「命のビザ」発給に先立ち、まず杉原はソビエト総領事館とあらかじめ交渉を行い、リトアニアを脱出したユダヤ人たちがソ連国内を無事に通過できるよう了解を取り付けた。ソ連の通過許可がおりなければ、いくら日本がビザを発給したところで元も子もなくなるからだ。

そして外務省との電報による交渉が始まる。

杉原の外務省への要請の骨子はおよそ次の通りであった。

1. 人道上どうしても拒否できない
2. パスポート以外でも形式にこだわることなく、領事が最適と認めたものでよい

3. 通過ビザの性質を失わないため、ソ連横断日数 20 日、日本滞在日数 30 日の合計 50 日間を申請する

しかしながら、当時日本政府は日独伊三国同盟締結を推進中で、外務省はドイツを刺激するようなことはすべきではないと判断し、杉原の要請を拒否。当時の外務大臣は就任したばかりの松岡洋右であった。

ここに当時の電報の一部を引用する。

1940 年 8 月 16 日

松岡外務大臣より在カウナス杉原領事代理宛電報第 22 号

電送第 27465 号

昭和 15 年 8 月 16 日 後 8 時 00 分

宛 在カウナス杉原領事代理

發 松岡大臣

件 避難民ノ取扱方ニ關スル件

第二二號

最近貴館査證ノ本邦經由米加行「リスアニア」人中携帯金僅少ノ為又ハ行先國ノ入國手續未済ノ為本邦上陸ヲ許可スルヲ得ス之カ処置方ニ困リ居ル事例アルニ付此際避難民ト看做サレ得ベキ者ニ対シテハ行先國ノ入國手續ヲ完了シ居リ且旅費及本邦滞在費等ノ相當ノ携帯金ヲ有スルニアラサレハ通過査證ヲ與ヘサル様御取計アリタシ

【現代語訳】

最近カウナス領事館発行している日本經由アメリカ行きのリトアニア人へのビザは、十分な旅費を持っていなかったりアメリカへの入国手続きが済ん

でないものも多く、日本への上陸許可を出すかどうかで外務省は扱いに大変困っている。そのため避難民にビザを発行するときにはアメリカへの入国手続きが済んでいることを確認し、日本での滞在費を含めた十分な旅費を持っていることを確認したうえでビザを発行するようにされたし。

1940 年 9 月 3 日

松岡外務大臣より在カウナス杉原領事代理宛電報第 24 号

電送第 29345 号

昭和 15 年 9 月 3 日 後 5 時 50 分

宛 在カウナス杉原領事代理

發 松岡大臣

件 避難民ノ取扱方ニ關スル件

第二四號

貴電第六七號ニ關シ船会社カ帝國領事ノ通過査證ヲ有スル者ノ乗船ヲ浦潮ニ於テ蘇官憲ノ命令ニ反シテ拒絶スルコトハ事實不可能ナルノミテラス右ハ我方査證ノ信用ヲ害スルモノナリ現ニ貴電ノ如キ取扱ヲ為シタル避難民ノ後始末ニ窮シ居ル実状ナルニ付以後ハ往電第二二號ノ通嚴重御取扱アリタシ

【現代語訳】

船会社が日本のビザを持った人の乗船をソ連警察の命令に背いてまで拒否することは事実上不可能であり、さらにこのようなビザを発行することは日本のビザの信用性を損なうものである。外務省としてはカウナス領事が発行したビザによる避難民の扱いに大変困っている。今後は先日の電信の通り、ビザ発行については嚴重な審査をして頂きたい。

日本の外務省としては、むやみにドイツを刺激する事態は避けたという思いもあり、条件に合致しないユダヤ人にまでやみくもにビザを発給することを拒否したのである。

杉原によるユダヤ人救出の「命のビザ」

リトアニアは1940年(昭和15年)8月3日に正式にソ連に併合されるが、日本領事館には前もってソ連から退去命令が出ており、杉原自身も外務省から「早く退去するように」との指示を受けていた。

外交上の緊急事態では国の指示を遵守するのは当然であり、外交官として杉原が本国からの指示に従ったからといって、それは決して責められるものではなかった。家族や杉原自身の身の安全を考えれば、指示通り領事館を閉鎖し、国外へ脱出するだけでよかった。

本国の指示に従わなかったとなれば、杉原の外交官としてのキャリアは絶たれ、ユダヤ人を助けたことがドイツへの敵対行為とみなされればゲシュタポに命を狙われる危険もあったのだから。

しかし、遠く離れた極東の地にいる者には分かり得ない逼迫した状況を肌で感じ、必死で助けを求めるユダヤ人たちを目の前にした杉原は、家族の理解と後押しもあり、外交官としての自分の立場や外務省の指示よりも、人間としてなすべきことを優先させるのだった。

「幸子、私は外務省に背いて、領事の権限でビザを出すことにする。

いいだろう？」

「あとで、私たちはどうなるか分かりませんが、そうしてください。」

私の心も夫とひとつでした。

大勢の命が私たちにかかっているのですから。

夫は外務省を辞めさせられることも覚悟していました。

「いざとなればロシア語で食べていくぐらいはできるだろう」

とつぶやくように言った夫の言葉には、やはりぬぐい切れない不安が感じられました。

「大丈夫だよ。ナチスに問題にされとしても、家族にまでは手は出さないだろう」それだけの覚悟がなければできないことでした。

(杉原幸子著「六千人の命のビザ」より)

1940 年（昭和 15 年）7 月 29 日の朝、カウナスの日本領事館の扉は門の前に立つ全てのユダヤ人のために開かれた。



夫が表に出て、鉄柵越しに「ビザを発行する」と告げた時、人々の表情には電気が走ったような衝撃がうかがえました。

一瞬の沈黙と、その後のどよめき。

抱き合ってキスし合う姿、天に向かって手を広げ感謝の祈りを捧げる人、子供を抱き上げて喜びを押さえきれない母親。

窓から見ている私にも、その喜びが伝わってきました。

（杉原幸子著「六千人の命のビザ」より）

いよいよ「命のビザ」発給作業の始まりである。

杉原はユダヤ人を一人ずつ呼び、名前は？行き先は？と質問し、ビザを手書きして行った。すでに 3000 人を超すユダヤ人たちが通過ビザの発給を待っていたが、現実的には 1 時間に 10 人分をこなすのが限界だった。



「1 人でも多くの人を救いたい」その思いから、杉原は朝から夕方遅く手が動かなくなるまで、食事や寝る間も惜しんでひたすらビザを書き続けたが、想定外の大量発給にビザ用紙の在庫も不足となり、在庫が完全に無くなってからは全て手書きで処理せざるを得ず、作業は予想以上に手間と時間のかかるものだった。

必死のビザ発給作業

7月29日に発給したビザは121枚。

翌30日には260枚、31日には146枚を発給した。

8月3日、リトアニアがソ連に併合され、14番目の共和国となると、杉原のもとにはソ連政府や本国からの再三の領事館退去命令が届くが、これを見做して約1ヶ月にわたりまさに寸暇を惜しんでビザを発給し続けた。

しかし、ソ連からの有無を言わせぬ退去命令に続き、外務省からも「即刻ベルリンへ行け」という緊急電報が届くに至り、いよいよ命令を見做できなくなった杉原は、仕方なくすべての重要書類を焼却し領事館を閉鎖。

一家が向かった先は老舗ホテル「メトロポリス」。

すぐにベルリン行きの列車に乗ることができないほど、杉原は疲れ切っていたのだが、ここにもユダヤ人がやってきた。

実は、領事館閉鎖に際し、杉原はこちらのホテルに移る旨の張り紙を残してきていたのだ。最後の力を振り絞り、ビザの代わりに渡航証明書の発給を続ける。

9月5日、ついに杉原一家がリトアニアを去らなければならない時がやってきた。

一家はベルリンに向かう列車に乗り込んだが、ユダヤ人たちはビザの発給を求めて駅のホームに群がり、杉原はこれに応え列車が動きだすギリギリまで車窓から手渡しされたビザを書き、列車が走りだしても窓から身を乗り出して書き続けた。

しかし、無情にも出発の時間。

「許してください、私にはもう書けない。みなさんのご無事を祈っています。」
夫は苦しそうに言うと、ホームに立つユダヤ人たちに深々と頭を下げました。
茫然と立ち尽くす人々の顔が、目に焼きついています。

「スギハアラ。私たちはあなたを忘れません。」

「もう一度あなたにお会いしますよ」

列車と並んで泣きながら走ってきた人が、私たちの姿が見えなくなるまで何度も叫び続けていました。

(杉原幸子著「六千人の命のビザ」より)

「命のビザ」により救われたユダヤ人

杉原は時間が許す限り、希望するユダヤ人に対してほぼ無条件にビザを発給した。明らかな偽造パスポートと分かっているが、有効期限が切れているが、所持金などほとんど持たないトランクひとつの着の身着のままの人間であろうが、とにかく目の前のユダヤ人が一人でも多く助かるようすべてビザを発行したのだった。

杉原が発給したビザは 2139 枚。

1 家族で 1 枚のビザでよかったため、記録から漏れている人を合わせると、杉原によって命を救われたユダヤ人はおよそ 6000 人とも 8000 人とも言われている。

6. 領事館閉鎖とユダヤ人の運命

杉原の必死の作業にもかかわらず、発給されたビザの数はすべてのユダヤ人を助けるには遠く及ばなかった。

逃げ遅れた多くのユダヤ人に迫るナチスの魔の手。残された彼らを待ち受ける過酷な運命とは！？

領事館閉鎖後のユダヤ人が直面した困難

そもそも運良く「命のビザ」を入手できた難民たちのすべてが目的地たどり着けた訳ではなかった。

カウナスの日本領事館が閉鎖された 1940 年には、ナチス・ドイツはデンマーク、ノルウェー、オランダ、ベルギー、フランスなどポーランドから西のヨーロッパをほぼその勢力下においており、ユダヤ人にとってドイツ軍が追撃してくる西方に退路を探すのは不可能であり、またトルコ政府によりビザ発給を拒否されたことで、トルコ領から直接パレスチナに向かう道も完全に閉ざされた。

リトアニアから生きて脱出するためには、もはやシベリア鉄道で極東に逃

れる他に手段は無く、その乗車券を購入できるか否かに彼らの運命がかかっていた。

しかし事はそう簡単には進まなかった。

というのも、当時ソ連は戦争による出費がかさみ深刻な外貨不足に陥っており、その状況を解消するためシベリア鉄道の乗車券はソ連の国営旅行会社「インツーリスト」に外貨払いで予約購入しなければならないと決まっていたからである。

当然のことながら、命からがら着の身着のままで逃げてきたユダヤ人難民たちが潤沢な現金を持っているはずもなく、彼らにとって高額の手ケット代という脱出のためのハードルは決して低いものではなかった。

一方、「命のビザ」を受け取ることが出来なかったユダヤ人たちの運命はどうなったのか？

彼らの多くは、悪名高いナチス・ドイツの移動殺戮部隊「アインザッツグ

ルッペン」の手により殺害されたり、強制収容所に送られて絶命した。

恐怖の移動殺戮部隊「アインザッツグルッペン」とは？

アインザッツグルッペンの歴史は1938年のオーストリア併合まで遡るが、第二次世界大戦の独ソ戦において彼らによる虐殺は最も大規模となった。



【Reinhard Heydrich】
Attribution: Bundesarchiv, Bild 146-1969-054-16 /
Hoffmann, Heinrich

ナチス党政権下のドイツの政治警察権力を一手に掌握し、ハインリヒ・ヒムラーに次ぐ親衛隊の実力者であった、のちの国家保安本部（RSHA）長官ラインハルト・ハイドリヒにより創設されたアインザッツグルッペンは、オーストリア併合の際に組織されたのを始まりとして、チェコスロバキア

のズデーテンラント併合、ポーランド侵攻、独ソ戦とドイツが東方へ領土を拡大するたびに編成された。

ポーランド侵攻以前のアインザッツグルッペンは知識人・聖職者・政治家など指導層を対象として殺害していたが、独ソ戦においては主にユダヤ人やロマ、共産党幹部などが虐殺の対象となった。

ドイツ軍により都市が陥落すると、アインザッツグルッペンはその都市の「敵性分子」を集め、森や野原に追いたて、そこで一斉に銃で殺害し、「敵性分子」自身に掘らせた壕に遺体を埋めた。

アインザッツグルッペンは、国家保安本部（RSHA）長官であるラインハルト・ハイドリヒ、あるいはハイドリヒの上官である親衛隊全国指導者兼全ドイツ警察長官ハインリヒ・ヒムラーの命令によって動いていたが、軍への臨時動員という形をとっていたため、形式的には国家保安本部（RSHA）に属さず、軍や軍集団に属した。

アインザッツグルッペンの指揮官は保安警察（ジボ）の秘密警察局（ゲシュタポ）と刑事警察局（クリポ）、そして親衛隊情報部（SD）などの将校たちで占められていた。

一方、その指揮下で実際に銃殺を行う兵士たちは、国家の軍隊ではなく、政治的に信頼できる親衛隊員から成るナチスの武装部隊（党もしくはヒトラー個人の私兵で武装親衛隊と呼ばれた）と、クルト・ダリユーゲが指揮

する秩序警察（オルポ）のに所属する警察官が多かったという。

保安警察や SD は自分たちだけでは十分な人員を確保できなかったため、武装親衛隊や秩序警察から人員を借りたことから、アインザッツグルッペンは多くの所属が混ざった混成部隊となった。

アインザッツグルッペンは、以下の 4 つの行動隊で構成されていた。

A～D の各隊は北部軍集団、中央軍集団、南部軍集団、第 11 軍に付属してその前線の後方で銃殺活動を行った。

<A 隊>

司令官はフランツ・ヴァルター・シュターレッカー。アインザッツグルッペ A は、北方軍集団に従って行動し、リトアニア、ラトビア、エストニアのバルト三国からレニングラードへ向けて進んだ。道中ユダヤ人や ロマ・共産主義者、その他ナチスにとって「好ましくない者」を大量に虐殺した。



シュターレッカーはベルリンにアインザッツグルッペン A が 24 万 9420 人のユダヤ人を殺害したことを報告している。

<B 隊>

司令官はアルトゥール・ネーベ。

アインザッツグループ B は、中央軍集団にしたがって白ロシアからモスクワ戦線へかけて進軍した。道中ユダヤ人やパルチザンと目された人々を大勢殺害。ネーベが隊長を務める間だけでも B 隊は 4 万 5,467 人の処刑の報告をしている。

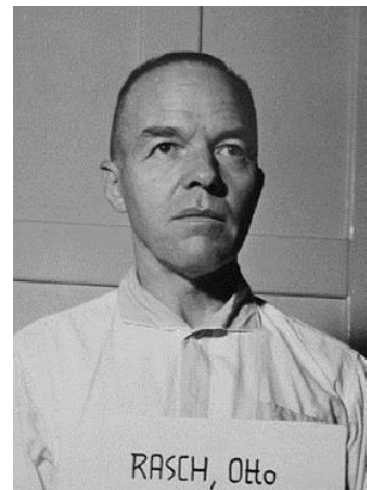


<C 隊>

司令官はオットー・ラッシュ。

アインザッツグループ C は、南方軍集団にしたがってウクライナに向けて展開。

キエフでは 1941 年 9 月の終わりに、バビ・ヤールの峡谷において 2 日間で 33,771 人のキエフ在住ユダヤ人が虐殺された。(バビ・ヤール大虐殺)



<D 隊>

司令官はオットー・オーレンドルフ。

アインザッツグルッペ D は、第 11 軍にしたがって南ウクライナを中心に活動しており、ここで 9 万人以上の民間人を殺害。

独ソ戦開始前のカウナスのユダヤ人人口は約 4 万

であり、開戦後わずか 2 カ月で 1 万人ものユダヤ人が殺害されたのである。



外交官杉原千畝がいた奇跡

1939 年から 1940 年という杉原のカウナス赴任は、それより早くても遅くても、ユダヤ人難民の救済に効果を発揮しなかった。

後に杉原夫人は「カウナスでのあの一カ月は、状況と場所と夫という人間が一点に重なった幸運な焦点でした。私たちはこういうことをするために、神に遣わされたのではないかと思ったものです」と述べている。

リトアニアにおけるナチスの大虐殺については次章に続く。

7. リトアニアにおけるホロコースト

リトアニアにおけるホロコースト（ユダヤ人虐殺）では、およそ 21 万人いたとされるユダヤ人のうち 19 万 5000 人から 19 万 6000 人が犠牲となり、そのほとんどが 1941 年 6 月から 12 月の間に殺害されたという。

杉原がカウナスから列車でベルリンに向かったのが 1940 年 9 月 5 日。

それからわずか 9 ヶ月後の出来事であった。

ユダヤ人は、なぜ差別され、迫害されるのか？

なぜ、多数のユダヤ人が虐殺されてきたのか？

ユダヤ人の受難はいつまで続くのか？

なぜユダヤ人は迫害されるのか？

歴史上、最初に確認される迫害は、紀元前 13 世紀の「出エジプト」である。詳しくは旧約聖書の「出エジプト記」に記されているが、飢饉のためエジプトに移住したユダヤ人たちは、そのままそこで奴隷にされ過酷な労働を課せられていたが、預言者モーセの導きによりエジプトを脱出することに成功する。

彼らはシナイ半島を 40 年間も放浪した後、神が約束したカナンの地に向かう途中の聖なるシナイ山の頂上でモーセを介して神ヤハウエと契約（シナイ契約）を結ぶ。



この時モーセが神から授けられた十戒は、いまでもユダヤ教の教義の中核となっている。

モーセの死後、その後継者となったヨシュアに率いられたユダヤ人は、ヨルダン川をわたり、イエリコの町とその地域を征服し、紀元前 11 世紀頃には、サウル王のもとで悲願のユダヤ人国家建国を成し遂げ、ダビデ王お

よびソロモン王の治世で、最盛期を迎える。

ところが、その繁栄も長くは続かなかった。

ソロモン王の死後、王国は北方の北イスラエル王国と、南方のユダ王国に分裂。その後、北イスラエル王国はアッシリア帝国に、ユダ王国は新バビロニア王国に、それぞれ征服され、ユダ王国の人々はバビロンに強制移住させられた。

この強制移住は「バビロンの捕囚」と呼ばれ、移送の際に多数のユダヤ人が虐殺されている。



出エジプトにつづく、第二のユダヤ人迫害である。

「出エジプト」と「バビロンの捕囚」という例を二つ挙げるだけでも、ユダヤ人が 3000 年以上前から差別と迫害を受けていたことがわかる。

だが、なぜ「ユダヤ人」なのか？

ユダヤ人を取り巻く問題は、すべて彼らがシナイ山において神と結んだとされる「契約」から端を発している。

この契約があったからこそ、ユダヤ人は自分たちを神に特別に選ばれた民族と考えており、自分たちだけが特権的に神から選択されたという「選民思想」を一貫して主張し続けた。

このユダヤ人のエリート意識ともいえる「選民思想」に基づく態度や行動が、反ユダヤ勢力からの反感を買い、ユダヤ人への残酷極まりない迫害の一因となってきたのだ。

そして時が経ち、ユダヤ人迫害を決定づける歴史的な大事件がおこる。

イエス・キリストの処刑である。



「イエス・キリストを殺したのはユダヤ人」

これは早くからキリスト教会で信じられ、語り継がれてきたことである。

イエスの死後、キリスト教はヨーロッパで急速に広まったが、ローマ帝国時代にはキリスト教徒はさまざまな差別・迫害を受けていた。

しかし、313年ミラノ勅令によりキリスト教が初めて公認されたことで、長かったキリスト教徒への迫害に終止符が打たれた。

これはキリスト教徒にとっては完全勝利であり、ユダヤ教徒にとっては新

たな差別と迫害の始まりであった。

このときすでにユダヤ人をイエス殺しの犯人とする考え方が、広くヨーロッパの人々の思想の根底に刷り込まれていたからである。

中世に入っても、ユダヤ人への迫害は続いた。

一つの例が十字軍である。

そもそも十字軍とはヨーロッパのキリスト教諸国が、聖地エルサレムをイスラム教諸国から奪還するために派遣した遠征軍であったが、エルサレム奪回という目的を果たした後にはイスラム教徒だけでなく、同地に残っていたユダヤ人も虐殺された。

ともに旧約聖書を聖典とするユダヤ人までをも虐殺するなど、キリスト教徒によるユダヤ人への憎悪がいかに根深いものかを示しているといえる。

リトアニアにおけるホロコースト

リトアニアにおけるホロコーストでは、およそ 20 万 8000 人から 21 万人いたとされるユダヤ人のうち 19 万 5000 人から 19 万 6000 人が虐殺の犠牲となり、そのほとんどが 1941 年 6 月から 12 月の間に殺害された。

犠牲者にはユダヤ人以外の者も含まれるが、短期間にこれほど多くの命が失われた例はリトアニア史上ほかに無い。

リトアニアで起きたホロコーストの歴史は次の3つの段階に分けられる。

まずは1941年の夏からその年の末まで

そして1941年12月から1943年3月まで

最後に1943年4月から1944年7月中旬まで

の3段階である。

ドイツの移動殺戮部隊「アインザッツグルッペン」はドイツ軍の進軍に合わせてユダヤ人を組織的に殺害していったため、リトアニアでは約8万人のユダヤ人が1941年10月までに殺され、年末までに約17万5000人が虐殺された。

この時点ではまだ強制収容所が出来上がっていなかったため、ユダヤ人たちが収容所に送られることはなかったが、その代わりに多くのユダヤ人が居住地の近くで射殺された。

カウナスやヴィリニウス近郊のポナリの森などで起きた大量虐殺は有名である。



アインザッツグルッペンの虐殺を生き残ったユダヤ人は、1942 年までの段階でおよそ 4 万 5000 人であり、その多くはゲットーや強制収容所へと送られた。

これがリトアニアにおけるホロコーストの第 2 段階である。

リトアニアではヴィリニュス・カウナス・シャウレイの 3 か所に大きなゲットーが設置されたが、この頃になるとナチスはドイツ経済を立て直すためにユダヤ人を労働力として強制労働させるようになり、虐殺の規模は縮小された。

しかし、1943 年 4 月から 1944 年 7 月中旬にかけてゲットーや収容所は解体され、ユダヤ人の虐殺が再びナチスの優先事項となった。

これがリトアニアにおけるホロコーストの第 3 段階である。

リトアニアでユダヤ人を襲った悲劇の背景

リトアニアでこのような悲劇が起こった原因は、1940 年（昭和 15 年）のソ連による併合に遡る。

1941 年（昭和 16 年）6 月 22 日にドイツがソ連に侵攻し独ソ戦が始まると、ナチス・ドイツはリトアニア人からは解放軍として歓迎され、絶大な支持を集めた。

リトアニア人の多くはドイツによってリトアニアの再独立が認められると信じており、ナチス・ドイツが展開していた反ユダヤ主義政策に同調する者も多くいたという。

ドイツ軍占領後、リトアニアのユダヤ人はただちに他のドイツ占領地と同様の制限が課せられた。すなわちダビデの星の着用、移動制限、購入制限、夜間外出禁止などである。

リトアニア人によるユダヤ人の大量虐殺

リトアニアにおいてユダヤ人を虐殺したのはナチス・ドイツだけではなく、多くのリトアニア人がユダヤ人に対するジェノサイド（大量虐殺）に積極的に関与しており、その背景にはいくつかの要因が挙げられる。

他のヨーロッパ諸国と同様に、当時の伝統や価値観には反ユダヤ主義的な要素が含まれていたことに加え、リトアニア人はリトアニア人だけで構成する「純粋な」国民国家を築き上げることを望んでいた。

そこにナチスにより意図的に広められたプロパガンダ「ユダヤ=ボルシェビズム」(※)が浸透したことで、「我々が解放されるためにはユダヤ人を殲滅するしかない」と、リトアニア人の反ユダヤ主義を煽り立てていったのである。

(※「ソ連に対する戦争は陰で糸を引くユダヤ人に対する戦争である」「ドイツによるソ連に対する侵略は解放戦争である」というプロパガンダ)

他にも、長引く不況下で生活が苦しくなる中、ユダヤ人の財産をめぐって殺害が行われたという側面もあった。

そして何よりドイツがリトアニアを支配するまでの間、リトアニアに降りかかった災難のすべてがユダヤ人のせいだと煽動されていたため、怒りはけ口がユダヤ人に向けられてしまったのだ。

殺害に加わった現地人の残虐性はドイツ人すら逃げ出すほどのものであ

ったとされており、その様子が記されたソリー・ガノール著「命のロウソク―日本人に救われたユダヤ人の手記」より、リトアニア人による虐殺の様子を一部抜粋する。

門をくぐった私たちの目の前に地獄図が広がった。(中略)

…2000 とも 3000 とも思える人々が固まっていた。人々の頭上、斜面の上の回廊部には多くは私服のリトアニア人十数人があちこちに陣取っていて、下の人たちを銃で狙い撃ちにするのである。いくつもの銃口から黄色い火花が散り、至るところ青い硝煙が立ち込める。

下の人々は弾丸を避けようとあちらこちらへと悲鳴をあげながら逃げ走る。死んだ者、負傷した人間がいたるところに転がっている。

それはおぞましい人間射的場そのものであり、犠牲者たちの発するうめきと叫びは実に恐ろしいもので、この光景は私の心に焼きついて離れなくなった。

(中略)

…1941 年 7 月の始めカウナスのユダヤ人住民に対して大量逮捕が行われた。10000 から 12000 の人々が第 7 要塞に連れていかれた。大多数は男性だが女性と子供もかなり混じっていた。

(中略)

…リトアニア人は常時酔っ払ってられるようビールとウォッカをたっぷり与えられており、それが炎暑と相まって彼らをいつそうサディスティックにしていた。

とりわけ無惨だったのは要塞の地下のバラック造りの収容室に閉じ込めら

れた若い女の人たちの運命である。夜になると、リトアニア人たちが彼女らを集団で引き出し、強姦した上で射殺するのだった。こうした夜が何日も何日も続いた。

あわれな彼女らはひどいパニックに陥り、リトアニア人たちが乱痴気騒ぎをやり、いちどに 10 人もの女性に集団強姦を加える間に発狂してしまう人もいた。顔を汚して難を免れようとする者もいたが無駄だった。母親と娘が同時に犯される場面も多かった。

(中略)

…要塞での最初の数日を生き延びた人は 7、8000 人いたがその後射殺され、ソ連軍捕虜たちの手で地下にうずめられた。

ソリー ガノール著「命のロウソクー日本人に救われたユダヤ人の手記」

「日本のシンドラー」と呼ばれる杉原千畝が発給した命のビザにより救われたユダヤ人は、このような過酷な運命を辿らずに済んだのである。
改めてその功績の大きさを考えざるを得ない。

8. 杉原の次なる舞台

ベルリンへ向かう列車の出発を待つホームで、助けを求めて追いつがるユダヤ人たちに断腸の思いで伝えた別れ。

「もっと多くの人を救えたのではないか…」

やり場のない感情を抱え、リトアニアを後にした杉原千畝を待っていた運命とは？

リトアニアを退去後の杉原

後ろ髪を引かれる思いでリトアニアを退去した杉原は、外務省からの辞令に従いドイツの首都ベルリンを訪れた後、1940年（昭和15年）にチェコスロバキアの在プラハ日本総領事館に領事代理として赴任。

そして1941年（昭和16年）3月にはドイツ東プロイセン州の在ケーニヒスベルク総領事館に領事代理として赴任した。

しかし、亡命ポーランド政府の情報将校たちによる全ヨーロッパ規模の諜報ネットワークの構築に関係したとして、東プロイセンの大管区の長官だったエーリヒ・コッホによりケーニヒスベルクからの即刻退去を命じられ

る。後にウクライナのユダヤ人虐殺者、美術品略奪者として悪名を馳せる
コッホは、大量のビザ発給でユダヤ人の逃亡を助けた杉原に赴任当初から
強い反感を持っていたのだ。

ポーランドと日本の関係

亡命ポーランド政府の諜報活動に協力したとして短期間でケーニヒスベ
ルクを追われた杉原だが、そもそも日本とポーランドとの間にはどのよう
な関係があったのか？

両国の歴史は第一次世界大戦に遡る。

ポーランドは長年支配者として君臨してきたロシアに対して積年の恨み
を持っており、日本はそんなロシアの当時世界最強と言われたバルチック
艦隊を海戦史上最も完全に近い勝利ともいうべき日露戦争の日本海海戦
において全滅させ、ポーランド独立の足がかりを作った歓迎すべき国であ
り、また、ロシアの圧政に苦しむポーランドに武器や資金を援助してくれ
た救世主でもあったのだ。

また、1918 年にポーランドがロシア帝国からの独立を宣言した際、ポーランドを国家として最初に承認したのも日本だった。

こういった経緯を経て日本とポーランドは共通の敵であるロシアに対抗するため、以後も友好関係をあたためてきた。

しかし、両国の良好な関係を一変させる出来事が起こる。

第二次世界大戦の開戦である。

1939 年 9 月ドイツ軍のポーランド侵攻で第二次世界大戦が勃発すると、ソ連軍の侵入を受けたポーランドは独立から 20 年余りで再び分割支配されることとなり、国を追われた政府首脳は国外に逃れ、ロンドンに亡命政府を樹立し、国内の抵抗運動を指揮した。

日本との関係においては、日本が日独伊三国同盟に加入し米英に宣戦布告したことで、ロンドンにあったポーランド亡命政府とは自動的に敵対関係となってしまった。

しかし形式的には交戦国となった両国だが、諜報活動の協力関係は水面下で密かに続けられていた。

日本は防共協定を結んだばかりのドイツが日本の仮想敵国であるソ連と不可侵条約を結び、協定を事実上白紙化したことに強い不信感を抱いており、ドイツとソ連に関する情報収集力の強化は目下最大の急務であった。

第二次世界大戦勃発の直後に日本人居住者のいないバルト海沿岸の小国リトアニアの首都カウナスに日本領事館が設けられ、その領事代理に外務省随一のロシア通である杉原千畝が任ぜられた背景には、既にドイツ国内に綿密な諜報網を持っていたポーランド軍と接触し、参謀本部の情報将校たちや、リトアニアにおけるポーランド諜報組織、さらにはロンドンの亡命政府の下にある軍事組織と諜報活動の協力関係を築くという重大な任務があったのだ。

一方、情報の見返りには、日本の外交特権で守られた外交行囊（外交使節団の連絡手段として利用される、使者が運ぶ封書のこと）を使い、在ヨーロッパ日本大使館やバチカン（ローマ教皇庁）の支援も受け、スウェーデ

ン経由でロンドンのポーランド亡命政府へ情報を運ぶという情報ネットワークが構築された。

また杉原はカウナスの日本領事館閉鎖が明らかになると、協力関係にあったポーランド軍人二名に対して日本の公用旅券を発行し、それにより一人は駐ベルリン日本陸軍武官室の通訳官として架空雇用され、ポーランド軍諜報部の現地指揮官として活躍。もう一人は杉原がケーニヒスベルクの領事館に赴任する際に同行して情報収集に協力した。

杉原らの動向に以前から不審を抱いていたドイツ防諜部は、密かに周辺の探索を続けていたが、ついに 1941 年（昭和 16 年）7 月上旬に日本陸軍武官室に雇われていたポーランド将校がドイツ側に逮捕されると、ベルリンのポーランド諜報機関は壊滅。

しかしながら、日本とポーランドの協力関係はストックホルムに駐在する小野寺信陸軍武官とその協力者であるポーランド将校に引き継がれ、ポーランドからの情報提供は日本の敗戦まで続けられた。

最後の任地ブカレストへ

ポーランドによる全ヨーロッパ規模の情報網構築に協力していたことが問題視され、ケーニヒスベルクからの退去を命じられた杉原は最後の任地であるルーマニアのブカレストに向かうことになる。

1941 年（昭和 16 年）12 月ルーマニアの日本公使館に一等通訳官として赴任した杉原は、この地で終戦を迎える。

日本がポツダム宣言を受諾し、無条件降伏した 1945 年（昭和 20 年）8 月 15 日から 2 日後、8 月 17 日に在ブカレスト公使館で家族と共にソ連軍に身柄を拘束された杉原は、この後 1 年間の収容所生活を送ることになる。

ブカレストの捕虜収容所へ連行された後、1946 年（昭和 21 年）12 月にはオデッサの収容所、1947 年（昭和 22 年）3 月にはナホトカの収容所と、次々と収容所を移動させられながらシベリアを横断するという過酷な日々を送るが、同年 4 月、ウラジオストクから興安丸に乗船し博多湾に到着。無事に帰国を果たすのであった。

収容所を移動するたびに荷物を奪われ、当初 30 個以上あったトランクも最後には身の回りの物を詰めたボストンバッグしか残らなかったという。

また収容所での検閲により、持っていた本はすべて没収され、カメラや写真も全て押収されてしまったが、唯一手元に隠して残せたのが有名なこの一枚、カウナスの日本領事館前に集まったユダヤ人たちの写真である。



杉原を「命のビザ」発給へと突き動かしたのは？

同盟国であるはずのドイツ国内で諜報活動を行い、名目上は敵国である亡

命ポーランド政府の情報将校と協力するという、非情な情報戦の世界に杉原は生きていたのである。

杉原が日本通過ビザを発給した最初の契機は、諜報活動で協力関係にあったポーランドの情報将校を安全な第三国に逃すためのものであり、それは彼らの家族など関係者を含めても多くて 600 名分のビザで済む予定で、ここまでは日本の外務省も参謀本部も承知のことであった。

しかし、想定外の出来事が発生した。

ナチスの迫害から逃れるためポーランドからリトアニアに流入してきた大量のユダヤ人難民が日本領事館へ殺到してきたことである。

恐怖に怯え、杉原を最後の頼みの綱として助けを求める彼らの目の前にし、ビザ発給の目的は大きく変わってしまった。

一刻を争う状況の中で「自分を頼りにすがってくる人たちを見捨てることなど出来ない」との思いが、杉原を「命のビザ」の大量発給へと突き動かしたのである。

9. 杉原が繋いだ命のバトン

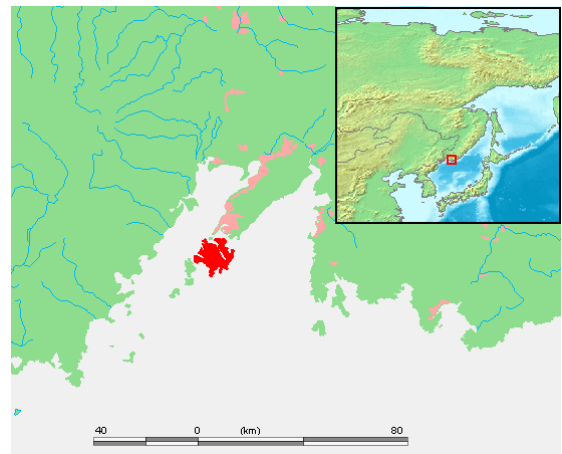
杉原が発行した「命のビザ」を手に入れたユダヤ人難民たちは、シベリア鉄道でおよそ2週間かけ極東のウラジオストクへ。

自らと家族の危険も顧みず、外交官としてのキャリアをも賭けて救いだしたユダヤ人たちは、どのようにして無事に第三国まで脱出することが出来たのか。

「日本のシンドラー」から引き継がれた命のバトン

（その1. 根井三郎）

リトアニアから国外脱出を果たしたユダヤ人たちはシベリア鉄道に乗り、ウラジオストクに到着した。当時、ウラジオストク総領事代理には、ハルビン学院（日露協会学校）において杉原



の2年後輩であった根井三郎が赴任しており、根井は杉原同様に命からがら逃げ出してきたユダヤ人難民の窮状に深く同情し、書類不備を理由に日本入国に難色を示す本省に抗議した気骨の外交官でもあった。

本国の外務省が大挙して押し寄せる条件不備の難民に困惑し、ウラジオストクの総領事館にビザの再審議を厳命した記録が残っている。

「本邦在外官憲カ歐洲避難民ニ與ヘタル通過査證ハ全部貴館又ハ在蘇大使館ニ於テ再検討ノ上行先國ノ入國手續ノ完全ナル事ノ確認ヲ提出セシメ右完全ナル者ニ檢印ヲ施ス事」

【現代語訳＝日本の官憲がヨーロッパから避難してくる人々に与えた通過許可証は、あなたのところやソ連の大使館でもう一度調べて、行先国に入る手続きが終わっていることを証明する書類を提出させてから、船に乗る許可を与えること】

しかし、ユダヤ人たちの窮状を目の当たりにした根井三郎は、1941 年（昭和 16 年）3 月 30 日の本省宛電信において以下のように回電し、官僚の形式主義を逆手にとって、一度杉原領事が発行したビザを無効にする理由がないと抗議した。

「避難民ハ一旦當地ニ到着セル上ハ、事實上再ヒ引返スヲ得サル實情アル爲（・・・）帝國領事ノ査證ヲ有スル者ニテ遙々當地ニ辿リ着キ、單に第三國ノ査證カ中南米行トナル居ルトノ理由ニテ、一率檢印ヲ拒否スルハ帝國在外公館査證ノ威信ヨリ見ルモ面白カラス」

【現代語訳＝逃げてきた人たちがここにまでやって来たからには、もう引き返すことができないというやむを得ない事情があります。日本の領事が出した通行許可書を持ってやっとの思いでたどりついたというのに、行先国が中南米になっているというだけの理由で一律に船に乗る許可を与えないのは、日本の外交機関が発給した公文書の威信をそこなうことになるのでまずいと思います】

(1941 年 3 月 30 日付の根井三郎による本省への抗議の電信)

これら外務省本省とのやり取りは 5 回にも及び、ユダヤ人たちから「ミスター・ネイ」の名で記憶されている根井三郎は、本来漁業関係者にしか出せない日本行きの乗船許可証を発給して難民の救済にあたったという。

杉原と根井、二人の出身校であるハルビン学院は 1920 年（大正 9 年）、元南満洲鉄道株式会社の総裁、後藤新平の肝いりで設立されたロシア語を学ぶための専門学校であり、同校のモットー「自治三訣」は、「人のお世話にならぬよう、人のお世話をするよう、そして、報いを求めぬよう」というものであった。

一度はシベリアの地で断たれるかに見えたユダヤ人たちの命運は、二人のハルビン学院卒業生の勇気ある行為によって救われたのだった。

「日本のシンドラー」から引き継がれた命のバトン

（その 2. 大迫辰雄）

ウラジオストク総領事代理であった根井三郎が外務省の命令に反し日本

に向かって出航させたユダヤ人たちの命のバトンは、Japan Bureau ニューヨーク支店（現 JTB、以下 JTB）の社員大迫辰雄に引き継がれることとなる。

当時、JTB はアメリカユダヤ人協会の依頼により、シベリア鉄道で逃れてきたユダヤ人難民たちに日本への連絡船を斡旋していた。

ユダヤ人を輸送したのは、「天草丸」という日露戦争で拿捕された元ロシアの客船で、期間は 1940 年（昭和 15）年の秋から翌年の春までの約 10 ヶ月であり、この船に乗り込んでいたのが JTB 社員の大迫辰雄だった。

ウラジオストクから敦賀までは、冬の日本海を 4 日間かけて横断しなければならず、波が高く大変な航海だった。

後に、大迫は以下のように述べている。

当時、毎週 1 回の割で 20 数回にわたって日本海を往復、添乗斡旋に当たった大迫辰雄は、各航海とも海が荒れ、船酔いと寒さと下痢に痛みつけられたうえ、異臭に満ちた船内斡旋のつらかったことを想起し、よく耐えられたものであると述懐している。

「日本交通公社七十年史」より

そんな中、大迫は食事の世話から病人の世話まであらゆる仕事をこなした

がら、日本の上陸に備え乗客の名簿を作らなければならなかった。

ユダヤ人は同じ名字であることが多く、しかも耳慣れない発音やコミュニケーションの問題など苦勞が多く、名前のチェックには大変な労力が必要だった。

日本に上陸するにはパスポートが必要であったが、持っていない人が身分保障に必要な現金はユダヤ人協会から JTB に送られており、それを配るのも大迫の役目でもあった。

ようやく一息ついたユダヤ人は「敦賀が天国に見えた」と言っていたという。こうして大迫は、1940 年～1941 年の厳しい冬の間、荒れ狂う日本海を 29 回往復し 6,000 人にも及ぶユダヤ人を運び、杉原から根井へと繋がれた命のバトンをしっかりと引き継いだのだった。

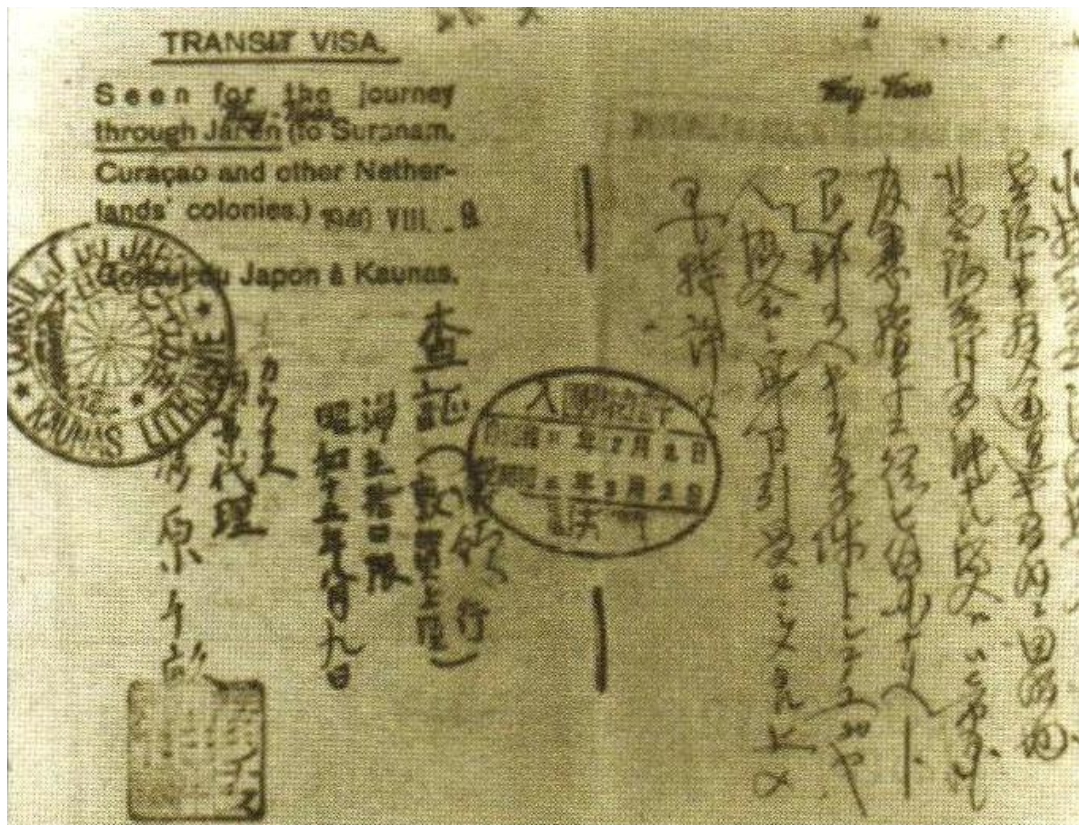
「日本のシンドラー」から引き継がれた命のバトン

（その 3. 小辻節三）

敦賀上陸後、ユダヤ人たちは新たな問題に直面することとなる。ビザの有

効期限だ。

当初、杉原は外務省に「日本滞在 30 日」のビザを申請していたが、本省から拒否され、仕方なく 10 日間の通過ビザで処理せざるを得なかったのである。



ところで、当時の「外国人入国令」の通過ビザの規定には日本滞在期間が 14 日以内となっていたのに、なぜ杉原は 14 日ではなく 10 日で処理したのか。

この規定通りにビザを発給するためには、受け入れ国の入国確認ができ、交通費他必要な経費を所持しているなど所定の条件を満たしていなければならない、杉原のもとを訪れたユダヤ人のほとんどがこの条件を満たしていなかったため、規定通りの日数では申請出来なかったのだ。

10 日間の有効期限のビザが意味すること、つまりそれは、日本に上陸したユダヤ人は 10 日以内に次にどこの国に行くか決めて出国しなければならないというものだった。

しかし、多くのユダヤ人が持っていたビザの行き先であるオランダ領キュラソーは南米ベネズエラの沖合に浮かぶ岩だらけの小島で、税関もないので入国できるということでユダヤ人の窮状を救うために考えられた方便の受け入れ国であった。

つまり、日本に上陸したものの次なる目的地は無いも同然で、10 日間という短期間で出国することなど不可能なことなのだった。

そこで途方に暮れるユダヤ人たちが、ユダヤ協会の働きかけで日本滞在延

長への協力を要請したのが、ユダヤ教の研究者であり信者である小辻節三だった。小辻は彼らからの要請を快く引き受け、何度も一緒に外務省に掛け合い、日本滞在の延長を許可してもらえるよう要請したが、まったく聞く耳を持ってもらえなかった。

困り果てた末、小辻は時の外務大臣である松岡洋右に直訴することにしたのだ。実は小辻と松岡の間には、松岡が南満州鉄道の総裁をしていたとき、松岡自ら口説いて小辻を総裁室に所属させユダヤ研究をさせたという経緯があり、二人は旧知の間柄であった。

「私は独・伊と同盟は結んだが、ユダヤ人を殺す約束まではしていない。」との松岡の言葉が残されている通り、松岡はユダヤ人に対して非常に好意的であり、小辻に対して秘策を授けるのだった。

松岡は言った。

ビザ延長を決める権限は神戸の自治体にある。もし君が自治体を動かすことができれば、外務省は見て見ぬふりをすることを約束する。

この言葉を受け小辻は、外国人の滞在許可を発行する警察署の幹部を神戸

一の料亭で接待し、打ち解け気心が知れた頃合いを見計らって、初めてユダヤ人難民たちが直面している窮状を説明し、滞在許可の延長を訴えたのだ。警察幹部は小辻の要請を受け入れ、一回の申請で 15 日間の延長を許可することにした。申請は無制限にできるので、回数を重ねれば長期滞在も可能となった。

こうして出国までの時間的猶予を与えられたユダヤ人たちは、日本人から温かい飲み物や食べ物をふるまわれるなど手厚いもてなしを受けた後、アメリカ、イスラエル、上海などへと安住の地を求め旅立った。

リトアニアの杉原千畝から始まった命のリレーは、ウラジオストクの根井三郎を経由して、ジャパンツーリストビューロの大迫辰雄へと繋がり、ユダヤ教学者の小辻節三へとバトンが渡されたのだった。

10. 上海に殺到するユダヤ人

1933 年にドイツにナチス政権が誕生して以来、大量のユダヤ人難民が発生し、各国がその受け入れに難色を示す中、日本では 1938 年（昭和 13 年）12 月 6 日、時の首相近衛文麿の最高首脳会議である五相会議において「猶太（ユダヤ）人対策要綱」を決議。

この中で、ユダヤ人排斥は日本が長年主張してきた人種平等の精神（八紘一宇の精神）に反するとして、以下の 3 つの方針を定め、ドイツの反ユダヤ主義には追従しないことが決定された。

- 一．現在、日本・満州・支那に居住するユダヤ人は、他国人と同様公正に扱い排斥しない
- 二．新たに日本・満州・支那に来るユダヤ人は、入国取締規則の範囲内で公正に対処する
- 三．ユダヤ人を積極的に日本・満州・支那に招致はしないが、資本家、技術者など利用価値のある者はその限りではない（すなわち招致も可）

なぜ上海なのか？

ナチス・ドイツの脅威がヨーロッパ全土に広がるにつれ、数百万のユダヤ人が世界各地に逃げ出さざるを得ない状態になった。

ビザを持たないユダヤ人難民は、シベリア鉄道で満洲のハルピンを経由する陸路か、日本の通過ビザを取得して、ウラジオストクから敦賀・神戸を経由する海路のいずれかの方法で上海を目指した。

杉原千畝が日本の通過ビザを発行した 6000 人のユダヤ人難民の多くも、後者のルートにより上海へ向かった。

なぜ上海なのか？

当時アメリカ・中南米・パレスチナでは、入国ビザの発給を非常に制限するなど、難民受け入れに関してほとんどシャットアウトの政策を取っており、ユダヤ人たちが欧州から逃げ出したくても、世界はその門戸を固く閉ざしていたのだ。

英国委任統治領パレスチナでは、多くのユダヤ人を乗せた難民船が海岸に着くと、その上陸を阻止するため陸上から英軍が機関銃の一斉射撃を加えるという非人道的行為まで行われた。

また、アメリカでは、1939 年（昭和 14 年）5 月 13 日ドイツから 930 名のユダヤ人難民をのせてキューバに向かった客船セントルイス号が、ハバ

ナに近づいたところで入港を拒否され、アメリカに助けを求めるも上陸の許可をもらえず、ヨーロッパに送り返された「セントルイス号事件」が起きている。

この時送り返された難民たちは、フランス・オランダ・ベルギー・イギリスの4ヵ国から入国を許可されるが、それから数ヶ月も経たないうちにドイツの侵攻を受け、イギリスに上陸した288名以外ほとんど生き延びたものはいなかったという。

このような状況で、当時、入国ビザなしで上陸できたのは、世界で唯一、大日本帝国海軍が警備する上海共同租界の虹口（ホンキュー）地区だけだった。

杉原がリトアニアからの脱出を助けたユダヤ人の多くが持っていたビザの渡航目的地はオランダ領キュラソーであったが、これは杉原に日本通過ビザを発行してもらうための方便に過ぎなかったもので、現実的にはビザを持たないのと同様であり、他に行くあてもないユダヤ人たちには上海に向かう以外の選択肢が残されていなかったのだ。

こうして上海に辿り着いたユダヤ人を迎えたのが海軍の「ユダヤ人問題専門家」犬塚惟重大佐。犬塚は日本人学校の校舎をユダヤ人難民の宿舎に充てるなど、ユダヤ人の保護に奔走した。



こうした努力により、上海にはヨーロッパからユダヤ人が続々と流入し、1939年には日本租界は約2万人ものユダヤ人で溢れかえっていた。

また、上海にはヨーロッパを追われた同胞を支援できるユダヤ人社会が存在したことも大きかった。

阿片貿易から不動産投資や銀行業等へ進出し、巨万の富を築いたサッスン、カドーリ、ハイム、アブラハム、ハードンなどの大富豪はユダヤ人難民を経済的に支援した。

彼らは主に北アフリカ、中東、スペインに居住した祖先をもつセファルディ系ユダヤ人と呼ばれており、当時上海にはこれらセファルディ系ユダヤ人以外に、1880年代からロシアやヨーロッパで起こっていた反ユダヤ主義を逃れてきた、東欧諸国（ドイツ、ポーランド、ロシア）に居住した祖先をもつアシュケナージ系ユダヤ人が4000人ほどいた。

アシュケナージ系ユダヤ人は主にレストラン・本屋・パン屋・玩具店・皮革店・写真展などの中産階級を形成しており、戦時中、特にゲットー設置後の難民支援において重要な役割を演じた。

上海租界とは？

租界とは、1842年（天保13年）の南京条約により開港した上海に設定された外国人居留地のことであり、当初、イギリスとアメリカ、フランスがそれぞれ租界を設定し、後に英米列強と日本の租界をまとめた共同租界と、フランスのフランス租界に再編された。上海租界はこれらの租界の総称である。



アヘン戦争敗戦後に締結された南京条約により、敗戦国である清国は上海を開港させられ、1843 年（天保 14 年）イギリスが上海に土地を租借したのを皮切りに、1848 年（嘉永元年）にはアメリカも虹口地区を租界として要求。

1863 年（文久 3 年）にはイギリスとアメリカの租界が合併して共同租界となり、後に日本もこの共同租界に参画した。

一方、フランスは共同租界への参加を促されるがこれを拒否し、1865 年（元治 2 年）独自の租界をつくった。

租界は欧米諸国が中国に持った特殊権益の場所であり、植民地とは異なり、中国から合法的に土地を借りるというもので、行政権と治外法権が認められた、中国でありながら中国ではない特殊な場所であった。

多数の欧米列強の施政のもと上海は急速な発展を遂げ、1920 年代から 1930 年代にかけて上海租界はその最盛期を迎えるが、1946 年（昭和 21 年）の太平洋戦争終結によりすべての租界は姿を消した。

ちなみに、上海租界の最大の収入源はスバリ「阿片貿易」。

上海が開港した当時、外国企業のほとんどが阿片貿易に従事していたとされており、当時合法的な外国製医薬品として輸入されていた阿片は、外国企業が上海で稼ぐ主要な手段だったのだ。

1840 年後半になると、上海で陸揚げされた阿片は、全中国の輸入量の半分を占めるようになり、上海は広州を抜いて中国最大の阿片輸入港となった。1900 年代初頭まで、上海には 1500 箇所もの阿片販売店や阿片喫煙所が作られ、驚くことに阿片の喫煙所の方が喫茶店やレストランよりも多く存在したという。

こうした独特の背景により上海は「魔都」と呼ばれるようになった。



上海にも迫るナチスの魔の手

ナチス・ドイツは「猶太人対策要綱」で定められた、上海のユダヤ人難民に対する日本政府のドイツからすれば「寛容な」政策を不愉快に思っており、様々な形で圧力をかけたが、日本政府が方針を変えることはなかった。

そこでナチス・ドイツが送り込んだのが、その悪魔的残虐さから「ワルシャワの屠殺人」の異名を取ったヨーゼフ・マイジンガーであり、マイジンガーは東京のアジア地区ゲシュタポ司令官に赴任した。

1942 年（昭和 17 年）7 月、反ユダヤ主義に積極的に賛同しない日本に業を煮やしたナチス親衛隊（SS）長官ハインリッヒ・ヒムラーの命を受け、上海に出張したマイジンガーはユダヤ人迫害を拒否する日本政府にホロコーストへの加担を要求。

通称「マイジンガー計画」と呼ばれるナチスからの提案は、上海在住のユダヤ人を虐殺するため、2 ヶ月後に迫ったユダヤ教の新年の祝祭ローシュ・ハッシュャーナーでシナゴークに集まるユダヤ人たちを捕え、虐殺するというものだった。

マイジンガーからはその殺害方法として以下の3つの選択肢を示された。

1. 廃船にユダヤ人を乗せ、東シナ海で日本海軍に撃沈させる
2. 郊外の岩塩鉱で酷使し、疲労死させる
3. 揚子江河口にユダヤ人収容所を作り、種々の人体実験に使用する

これらの提案は陸軍最大の「ユダヤ問題専門家」である安江仙弘大佐を経由し、外務大臣である松岡洋右に伝えられたが、松岡は「独伊と同盟は結んだが、ユダヤ人を殺す約束まではしていない」としてこの提案を拒否。

結果として、上海におけるユダヤ人の大量虐殺は実現しなかった。

上海に渡ったユダヤ人の運命

上海に逃れてきたユダヤ人の大部分は、上海を最終的な移住先と考えていたわけではなく、アメリカなどへの移住ビザが得られるまで一時的に滞在するつもりだったが、日米開戦により上海で足止めを余儀なくされたのである。

1937 年以前、上海にやって来たユダヤ人たちの生活は比較的安定していた。しかし、1937 年（昭和 12 年）7 月の日中戦争をきっかけに、彼らを取り巻く環境は日増しに悪化。

第二次世界大戦が開戦すると、上海のユダヤ難民はさらに厳しい立場に追い込まれていった。同盟国ドイツの反ユダヤ政策への日本側の配慮という形でゲットーが設置され、日本政府のユダヤ人に対する政策も保護政策から監視政策へと変更していったのだ。

日本政府は政策を転換するにあたり、すべてのユダヤ人を同列に扱った訳ではなかった。セファルディ系ユダヤ人のうちイギリスとアメリカの国籍を持つ者は敵性外国人としてゲットーに閉じ込められたが、おなじくセファルディ系ユダヤ人でもイラク国籍の者やアシュケナージ系ユダヤ人に対しては特に規制は加えられなかったのだ。

上海においてナチス・ドイツの「ユダヤ人問題の最終的解決」つまり組織的なユダヤ人の大量虐殺は、上述の通り、「マイジンガー計画」を外務大臣の松岡洋右が拒否したことで実現しなかったが、代わりに 1943 年（昭

和 18 年) 2 月に「無国籍難民隔離区」(通称: ゲットー) を設置し、同盟国であるドイツの働きかけに応えた。

このことは上海の新聞とラジオで「無国籍難民の居住及び営業に関する布告」として発表された。

1. 軍事上の必要に基づき、本日より、およそ上海地区内に居住する無国籍難民は、その居住及び営業地区を以下の地区に限定する。共同租界内の兆豊路(現: 高陽路)、茂海路(現: 海門路)及び鄧脱路(現: 丹徒路)のライン以東、楊樹浦河(現: 楊樹浦港)以西、東熙華徳路(現: 東長治路)、茂海路及び匯山路(現: 霍山路)のライン以北、共同租界の境界線以南。
2. 現在前項に於いて指定された地区以外に居住或いは営業中の無国籍難民は、本布告の公布日より昭和 18 年(中華民國 32 年) 5 月 18 日までに、その住所或いは営業所を前項に指定された地域内に移さなければならない。現在前項に指定された地区以外の無国籍難民は、その居住や営業上必要な家屋、店舗及びその他の設備を売買、譲渡或いは賃借しようとする場合、まず先に当局の許可を得る必要がある。
3. 無国籍難民を除く人々は、許可を得ることなく第 1 項に指定された地域に移動することはできない。
4. およそ本布告に違反したり、本布告を妨害した者は、重罪を免れない。

上海方面大日本陸軍最高指揮官

上海方面大日本海軍最高指揮官

昭和 18 年(中華民國 32 年) 2 月 18 日

およそ 2 万人のユダヤ人難民がこのゲットーで生活をし、1945 年（昭和 20 年）8 月の終戦を迎えた。この間、ヨーロッパのような大虐殺が行われることはなかったが、それでも病気などで約 2000 人が死亡し、そのほとんどが老人と子供であった。

第二次世界大戦が終わり、1948 年（昭和 23 年）にイスラエル国家が建設されると、上海のユダヤ人のほとんどが新天地イスラエルへと去り、最大 2 万人ともいわれた上海のユダヤ人コミュニティは 1957 年（昭和 32 年）にはおよそ 100 名となり、現在では数名を残すのみとなった。



11. 感動の再会

外交官としての最後の赴任地であるブカレストで終戦を迎え、収容所を転々とした後にやっとの思いで帰国を果たした杉原。

日本帰国後の彼を待っていた外務省の冷遇と、「命のビザ」により救い出したユダヤ人たちとの感動の再会とは。

外務省退職は「命のビザ」発給の報復！？

戦争が終わり、やっとの思いでヨーロッパから帰国した杉原を待っていたのは、外務省内のリストラを理由とした辞職勧告だった。

事の経緯を杉原本人がほとんど語っていないため真偽の程は定かではないが、杉原が人道的立場から発給した「命のビザ」は、正式に本省の許可を得てはいなかったため、その責任を取らされる形で辞職を迫られたと考えるのが自然だろう。

こうして外務省きつてのロシア通といわれた杉原は、47 歳にして外務省を去ることとなった。

外務省退官後は、覚悟していたとはいえ一家の生活は困窮し、食事にも事欠く日々が続く。そんな中、三男を小児がんで亡くすなど身内の不幸にも見舞われ、杉原の日本での再出発は苦難に満ちたスタートとなった。

しかし語学が堪能であったことが幸いし、連合国軍の東京 PX（進駐軍向けの商店）で日本総支配人としての職を得る。

その後いくつかの職を転々とした後、1960 年（昭和 35 年）には川上貿易のモスクワ事務所の所長として、再びヨーロッパの地に舞い戻ることとなった。モスクワには単身で赴任し、以降 15 年もの長期に及ぶ海外駐在員生活を過ごした後、1986 年（昭和 61 年）7 月 31 日、86 歳でその生涯を閉じた。

なお、日本国政府による式な杉原の名誉回復が行われたのは、彼の死後 14 年も過ぎた 2000 年（平成 12 年）10 月 10 日になってのことだった。

これまでに外務省と故杉原氏の御家族の皆様との間で、色々御無礼があったこと、御名誉にかかわる意思の疎通が欠けていた点を、外務大臣として、この機会に心からお詫び申しあげたいと存じます。

日本外交に携わる責任者として、外交政策の決定においては、いかなる場合も、人道的な考慮は最も基本的な、また最も重要なことであると常々私は感

じております。故杉原氏は今から六十年前に、ナチスによるユダヤ人迫害という極限的な局面において人道的かつ勇気のある判断をされることで、人道的考慮の大切さを示されました。私は、このような素晴らしい先輩を持つことができたことを誇りに思う次第です。

(2000 年 10 月 10 日の河野洋平外務大臣による演説より)

余談であるが、「シンドラーのリスト」のオスカー・シンドラーも、終戦後は次から次へと事業を起こしては失敗し、資金繰りに奔走するなど非常に苦しい生活を強いられていた。

そんな彼の状況を聞き及んだユダヤ人たちが彼をイスラエルに招待。

シンドラーは一年の半分を彼が救ったユダヤ人たちのもとで過ごすようになり、1974 年（昭和 49 年）に 66 歳でその生涯を閉じた後は、彼自身の希望によりエルサレムのローマ・カトリックの教会墓地で安らかに眠っている。

なお、彼の名が広く一般に知られる契機となったのは、1982 年（昭和 57 年）にオーストラリアの作家トーマス・キニーリーが出版したノンフィクション小説がベストセラーとなったこと、そしてこの作品を映画化した「シンドラーのリスト」がハリウッド映画界の巨匠スティーヴン・スピル

バーグ監督によって世界的に大ヒットを収めたことによる。

多くのユダヤ人を救った二人のシンドラーだが、彼らの功績が正当に評価され、日の目を見るようになるまでに、ともに長い年月がかかったことは何とも奇妙な偶然である。

「Sempo Sugihara」の発見と感動の再会

戦後、ユダヤ人たちは戦争中に様々な形で恩義を受けた人々を一人ひとり探し出してはお礼を続けていたが、杉原の発見には実に 28 年もの多くの月日を要した。

一体なぜこんなにも時間がかかってしまったのか？

実は、杉原は自身の「千畝（チウネ）」という名前は、ユダヤ人にとっては発音が難しかったため、音読みで「Sempo（センポ）」と呼ばせていた。そのため、ユダヤ人たちは「チウネ・スギハラ」ではなく、「センポ・スギハラ」を探し続けていたのだ。

実際、杉原の消息を尋ねるユダヤ人協会からの問い合わせに対して外務省は、「日本外務省には SEMPO SUGIHARA という外交官は過去においても現在においても存在しない」と回答したという。

しかし、当時の外務省関係者名簿に杉原姓は 3 名しかいなかったのも、名前が異なっても苗字から推察することは容易であったはず。

それにも関わらず、このような紋切り調の回答に終始するあたり、外務省内での杉原の扱いが如何なものであったか想像に難くない。

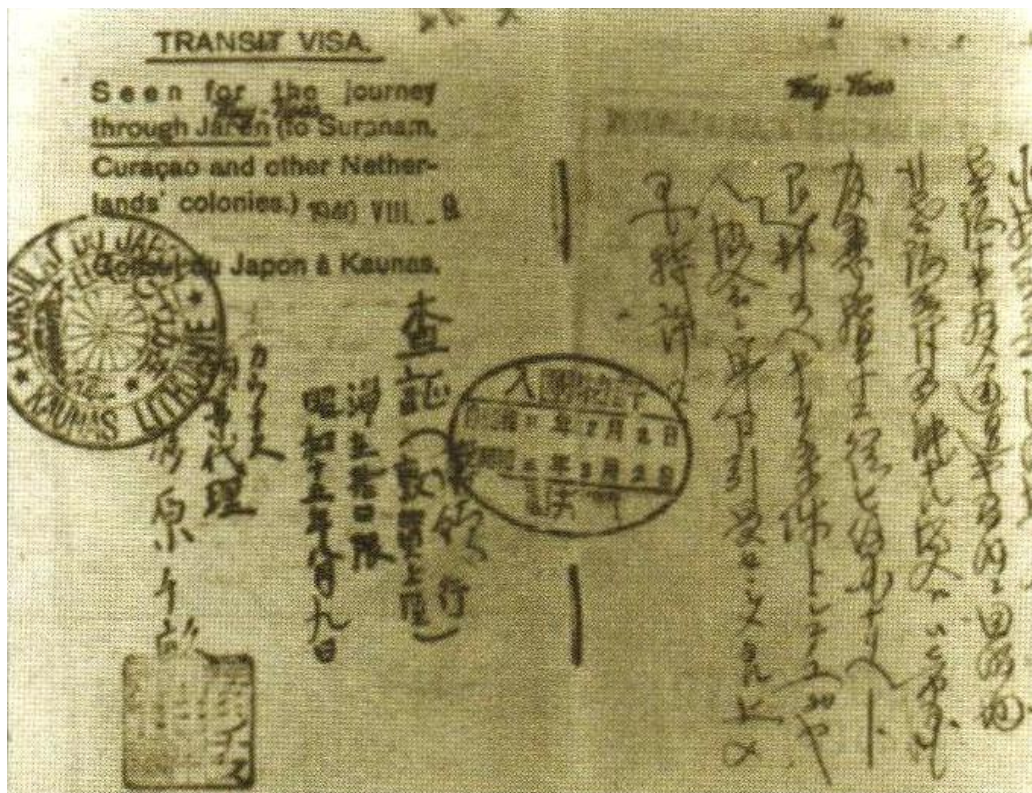
1968 年（昭和 43 年）8 月のある日、ソ連との貿易の仕事の間に一時帰国していた杉原の元に、イスラエル大使館から一本の電話がかかってきた。

特に心当たりもなく不思議に思う杉原だったが、兎にも角にも大使館に赴き、一人の参事官と面会する。

その参事官は杉原に会うなり「私のことを覚えていますか？」と聞いてきたが、記憶に無い人物であったため「申し訳ありませんが・・・」と答える

と、その参事官はボロボロになった一枚の紙切れを杉原に差し出した。

それこそがまさに杉原が発給し、多くのユダヤ人を救った「命のビザ」であつた。



「あなたは私のことを忘れたかもしれませんが、私たちは片時たりともあなたの事を忘れたことはありません。28 年間あなたのことを探していました。やっと、やっと会えました “Sempo Sugihara”。」

彼は涙ながらにそう杉原に告げた。

この参事官こそ、カウナスでユダヤ人代表の一人として、ビザの発給について杉原と交渉を行ったニシュリだった。

実に 28 年ぶりの再会である。

彼は参事官として日本のイスラエル大使館に赴任すると、“Sempo Sugihara” をなんとしても見つけ出し、あの時のお礼をしなければと八方手を尽くしていたのだった。

杉原の発見に繋がるきっかけとなったのは、彼が救い出したユダヤ人たちの安否やその後の消息を気にかけて、イスラエル大使館に自らの住所を伝えてあったためであり、これによりニシュリはついに杉原を探し出すことができたのだ。

この年、杉原の四男伸生がイスラエルのヘブライ大学に公費留学生として迎えられた。これは杉原の恩に報いるためイスラエル政府が招聘したものであった。

翌 1969 年（昭和 44 年）、杉原自身もイスラエルに招待された。出迎えたのは宗教大臣のゾラフ・バルハフティック。



彼もまたカウナスでビザ発行の交渉を杉原と行い、「命のビザ」によって命を救われたユダヤ人の一人だった。

長い月日を隔て、生きて再会を果たせた奇跡を喜び合った二人であったが、バルハフティックはこのとき驚くべき事件の真相を知ることになる。

彼らの命を救った「命のビザ」と言われる日本通過ビザは、杉原が外務省と交渉して許可されたものだと思っていたが、実際には日本政府からは反対されていたこと、そして杉原がそれを押し切り独断で発給を続けていたということ。

さらにそのことが原因となり、杉原の外交官としてのキャリアは絶たれ、ユダヤの民族の恩人として永遠に語り継いでいかなければならない偉大な功績に対し、日本政府からは顕彰どころか逆に譴責のみが与えられたと

いう事実を。

実際には、日本政府の許可なしであったことを私たちが知ったのは、1969年に杉原氏とイスラエルで再会した時である。

杉原氏が訓命に背いてまで、ビザを出し続けてくれたなんてことは、再会するまで考えられなかったもので、とても驚いたことを覚えている。

杉原氏の免官は疑問である。

日本政府がすばらしい方に対して何もしていないことに疑問を感じる。

賞を出していないのはおかしい。表彰していないのは残念である。

杉原氏を支持している方は多くいるが、私は 20 年前から、日本政府は正式な形で杉原氏の名誉を回復すべきだといっている。

しかし日本政府は何もしていない。大変残念なことである。

(1998 年 5 月 25 日のエルサレム郊外でのインタビュー)

“Sempo Sugihara” の発見とそれに引き続く事件の真相の判明はユダヤ人たちに大きな衝撃を与えた。

自分たちの命を救った極東の島国の気骨ある外交官の勇気と英断をまったく評価しない日本国政府に代わり、ユダヤ人たちはその恩に報いるためヤド・ヴァシェム（ナチスの犠牲者追悼のための国立記念館）に杉原の名前を飾り、「諸国民の中の正義の人」の称号を贈ってその功績を讃えた。

「諸国民の中の正義の人」とは、ナチスによるホロコーストから自らの生命の危険を冒してまでユダヤ人を守った非ユダヤ人の人々を表すイスラエルで最も名誉ある称号であり、杉原はこの賞を授与された唯一の日本人なのである。

また、ゴールデン・プレート（ユダヤ民族で世界に偉大なる貢献をした人物、もしくはユダヤ人が忘れてならない恩恵を与えてくれた人物の名を刻んだプレート）にも、モーゼやメンデルスゾーン、アインシュタインといった錚々たる偉人たちと並んで杉原の名が刻み込まれている。

さらに 1985 年（昭和 60 年）11 月にはイスラエルのエルサレムの丘に杉原の功績を称える顕彰碑が建てられることになり、病床の杉原に代わってイスラエル在住の四男伸生氏が除幕式に出席。伸生氏は集まっていたユダヤ人たちから握手攻めに遭い、その様子を手紙で知った杉原の目には涙が溢れたという。

杉原自身はユダヤ人を救った功績をあまり多く語ることはなかったが、亡くなる一年ほど前にビザ発給の動機をこのように答えたという記録が残

っている。

あなたは私の動機を知りたいという。

それは実際に避難民と顔をつき合わせた者なら誰でもが持つ感情だと思う。

目に涙をためて懇願する彼らに、同情せずにはいられなかった。

避難民には老人も女もいた。

絶望のあまり、私の靴に口づけする人もいた。

そう、そんな光景をわが目で見た。

そして当時、日本政府は一貫性のある方針を持っていなかった、と私は感じていた。軍部指導者のある者はナチスの圧力に戦々恐々としていたし、内務省の役人はただ興奮しているだけだった。

本国の関係者の意見は一致していなかった。彼らとやり合うのは馬鹿げていると思った。だから、返答を待つのはやめようと決心した。

いずれ誰かが苦情を言うてくるのは分かっていた。

しかし、私自身これが正しいことだと考えた。

多くの人の命を救って、何が悪いのか。

もし、その行為を悪というなら、そういう人の心に邪なものが宿っているからだ。

人間性の精神、慈悲の心、隣人愛、そういった動機で私は困難な状況にあえて立ち向かっていった。

そんな動機だったからこそ勇気百倍で前進できた。

さらにいつも淡々とかう語っていたという。

新聞やテレビで騒がれるようなことじゃないよ。

私は、ただ当然の事をしただけだから。

(完)

ユダヤ人を救った日本のシンドラー【杉原千畝物語】

いかがでしたでしょうか？

私たち ACTION なう！実行委員会では、「日本のシンドラー」、「東洋のシンドラー」とも言われる日本の誇り杉原千畝さんの功績を再評価し、その栄誉をたたえ国民栄誉賞を付与していただきたいと署名活動を行っております。

趣旨にご賛同いただける方は、ぜひ署名のご協力をお願いします。

杉原千畝 国民栄誉賞

検 索



URL はコチラ→ <http://action-now.jp/archives/633>

「命のビザ」で 6000 人ものユダヤ人を救った

「日本のシンドラー」杉原千畝氏を再評価し、国民栄誉賞を！

「ACTIONなう！」とは？

「ACTIONなう！」とは、“希望あふれる日本”にするため、わたしたちの小さな気づきや生活にかかわる問題などの解決のための署名サイトです。

身近な問題から政策まで、幅広い分野での問題の解決を目指します。

今までの署名活動は、自分の署名が実際に誰に渡され、実現されるのかが不明瞭な場合もありました。そこで、「ACTIONなう！」では、実現してくれる人を明確にし、直接国会議員等へ署名を届けます。

“希望あふれる日本へ”

つながろう。変えよう。ACTIONなう！

ACTION なう！実行委員会

ユダヤ人を救った日本のシンドラー【杉原千畝物語】

2015 年 7 月 2 日 初版第 1 刷発行

著 者：Action なう！実行委員会

発行元：Action なう！実行委員会

〒107-0052

東京都港区赤坂 1-9-13 三会堂ビル 2F